

175
34
111

吉史傳

十六

198
77

東 京 圖 書 館			
和書門	國史類	二六函	一號
			冊

古史傳

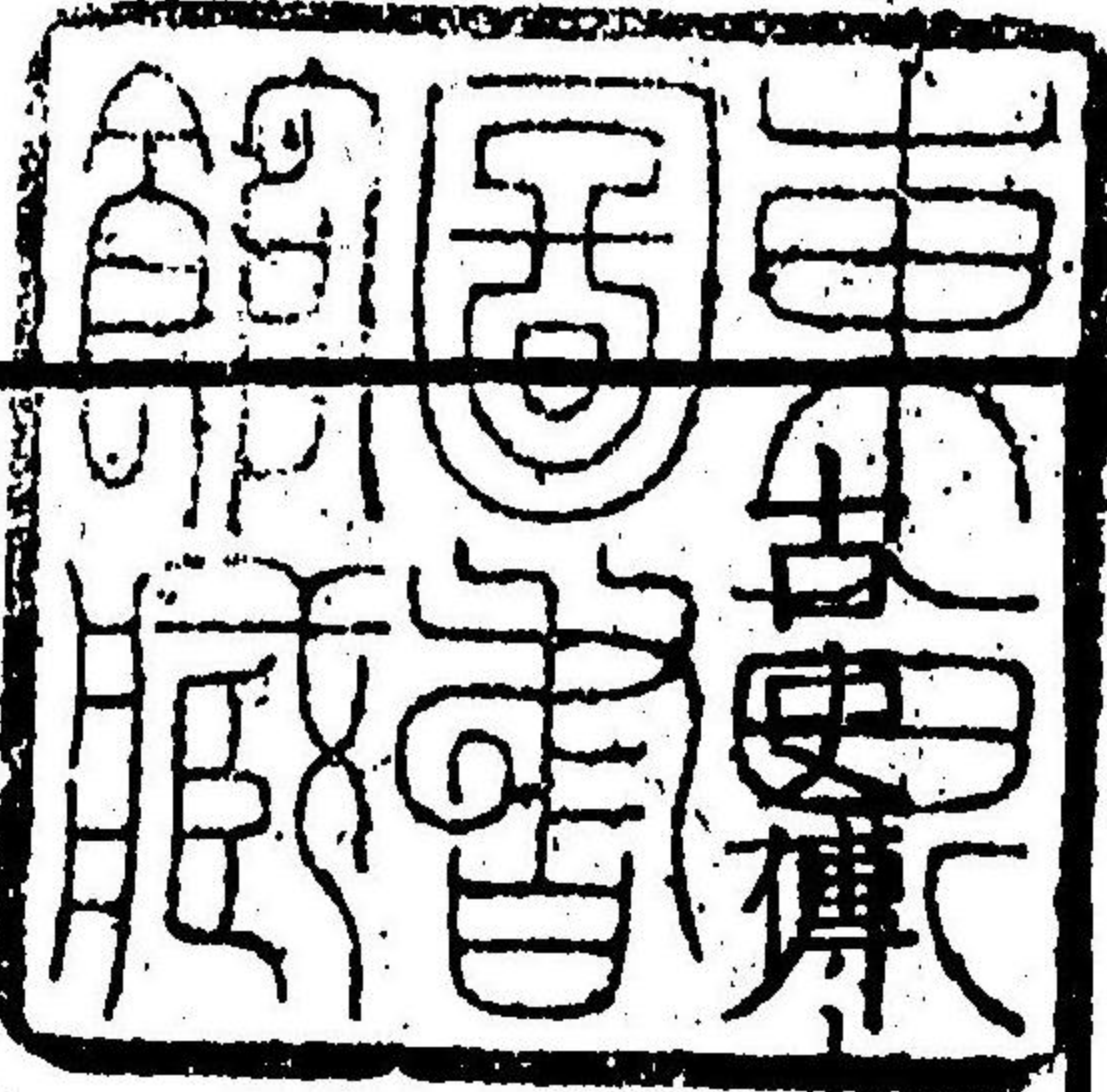
自第一十四段
至第七十九段

十六

128
36
3

Large page with faint, illegible text, possibly bleed-through from the reverse side. The text is arranged in vertical columns and is extremely light and blurry.

Large page with very faint, illegible text, possibly bleed-through from the reverse side. The text is arranged in vertical columns and is extremely light and blurry.



古史傳十六出卷

神代中八出卷

平篤胤護撰

男 鐵胤
孫 延胤

續攷

四十七

此大神又娶大山津見神出女。

名神大市比賣命而令生出子

大年神。亦云大歲。故此大年神。

出子御年神。亦子奥津日子神。

次奥津比賣命。亦名大戸。此二

柱神。謂庭津日神。亦云庭高。此

者諸人出持伊都久寵神也。亦

子阿須波神。次波比岐神。此者

座摩出御巫出持伊都久神也。

亦子香山戸神。次羽山戸神。亦

子大山咋神。亦名山末。此神者。

坐近淡海因日枝山。亦坐葛野

出松尾神也。亦子大土神。亦云

出御ノ此神者。度會出地主神也。
カヤノカミト

亦子稻依比女命。亦子千依比
メノミコトイナヨリヒ

賣命。亦子佐佐津比古命。此三
メノミコトマタノミコ

柱神亦坐度會縣神等也。
バシラノカミモ

此大神とは前段を承て。須佐之男大神を申せ也。○神大
市比賣命師云上小神と置を稱名也。例に大市を和名

抄ふ。大和國城上郡大市。於保以智。
オオホノカミモ

地也。參河國碧海郡大市。播磨國揖保郡大市。
オホノカミモ

窪屋郡大市。伊勢國安濃郡大市。神社おど
オホノカミモ

何ゆ。此地。此中よ由ある有む。今云師説を如此。此れを
オホノカミモ

猶と考。○娶也。師云美阿比氏と訓べし。此字常ハ賣
オホノカミモ

言上小御合とある是也。○大年神。師云名義大を例
オホノカミモ

此稱名。年は田寄あり。多余を切て登とある。さて余世を
オホノカミモ

多。然云故を。まお登志とを穀のおとあり。其を神の御靈
オホノカミモ

以て。田お成して。天皇お寄奉賜ふ也。云云。田より寄
オホノカミモ

ふて、穀を登志。祈年祭祝詞。皇神等能依左志奉年奥津

と云云。御年乎云。八束穗能伊加志穗爾皇神等能依左志奉者

云く。せあるを以て知。天下ふ成とし成る穀を悉く

を云り、奥津御年を、加茂翁説ふ。稻を云、稻を穀の中にも

晚く成るも、奥と云あり、同じ稻此中ふても、晚をた

てと云ふ。けて穀を一度取、收るを一年と云ふ。登

志と云名、穀を本ふて。斯て此神を、此穀の事、大

年月の登志、ハ末あり。功坐し故ふ。此御名を、負給ふ

字此同じき、付。けて諸、大歳神社を云、多う候

てお思ひ、混り。此神を齋へ、るも有べく、はと其處、ふて

し神。然稱名、けて祭れるも有る。倭姫命、世記、眞名

鳴るを、大歳神と号、けて祠給へ。是も穀、功有し故
あり、是多神名、祕書せ、云物よ、今此の神、此鶴、り給ひ
てと云、るを、名、付。○示云、大歳御祖命、お此御名を、木祖
多此推、あて説、う。

草祖、大山罪御祖命、大土之御祖神、おと白せる例、ふ穀の

事、功有しを、稱、て御祖と申せ、候、御祖命と白

を始、父母を、い、御祖の意、を。御年神、名、義、大年、同じ。

此神も、父神と同じ、穀、此事、大、功、坐し、ある、九第

十七段、よ、此神、之、御子、大地主、神の、營、田、よ、神名、式、ふ、山城、

崇を、おし、給ひ、し、事を、記、せ、り、披、き、見、べ、し、大和、因、葛、上、郡、よ、葛、木、御、歳、

因乙訓、郡、よ、大歳神社、大、月、次、新、嘗、大和、因、葛、上、郡、よ、葛、木、御、歳、

神社、名、神、大、月、次、新、嘗、○此、社、を、因、史、ふ、仁、寿、二、年、四、月、庚、

御歳、神、正、二、位、貞、觀、元、年、正、月、大、和、因、正、二、位、葛、木、御、歳、神、

從、一、位、同、八、年、二、月、己、未、神、祇、官、奏、言、大、和、因、三、歳、神、舊、無、

神主而新置之致崇答実由此仍更停焉おど見
也考證よ今持田村東森脇村と云よ在せぞ 高市郡小
大歳神社二座。おと一座を御歳神ある御歳神社。整敷○
今在在所と。和泉国大鳥郡小大歳神社。整○和泉志よ按
れとぞ。菱木荒田下大鳥高石取石大庭山田峰田九処。攝津国住
有大歳社不知何式内神社大歳神といふ也。吉郡小
草津大歳神社。おと在川田村を遠江国長下郡小
大歳神社。當国の式社考ふ神立村ある牛頭駿河国安部
郡小大歳御祖神社。府中の賤機山といふよ坐て今を奈
歳御祖神社雷神譽田天皇四年癸巳始祭之大歳御祖但
神者号玉依姫賀茂健角見命之女也とあり信がとら
馬国二方郡小大歳神社石見国那賀郡小大歳神社。此を
お貞観十三年四月三日但馬おど載され清和天皇紀貞
国大歳神授從五位下とあり

觀九年十月五日此下ふ飛驒国正六位上大歳神從五位
下。とも見也。但しおと神名式。奥津日子神。奥津比賣命。
師説ふ奥津を地名う。古今集ふ貫之が和泉国小侍けは
時よ倭とて越まうで來て讀て遣しける藤原忠房君を
思ひ沖津の濱ふ鳴鶴此云くおれう。沖津濱或書よ和泉
日根郡よ在とも云すゆ大鳥郡よ大歳神社もあはま
和泉郡積川神社も由あること波比岐神の下よ見也。
おと駿河国ふも此地名何也。同国安倍郡よ大歳御祖神
郡小奥津比咩神社あまど其を辺津比。を何也。然れど此
咩神社と並はれむ此神ふはあらじ。神等此御名よ地名を
負給はむこや。似おるをし有祿む。奥津を置土の省語
ふて。竈此事ふや。竈は土を置て作れ

ばあに。さて地名を却りて此神等の御名と出けむも
知はらび又へッヒと云ふ就て思ふに奥津火
辺津火と對する言ふまゝと火をオキとも云り其ハ古今
集よおきのあて身を焼くとも悲し死に云くとあは
考合ま。ちて此比賣神ふれみ命とあははいか。○大戸
比賣神。師云。戸を幣音濁と訓はし。幣ハ竈カドの事あは。都上豫母
の下ふ云。ちて和名抄。河内、国河内郡大戸郷あり。姓氏
錄大戸首此下ふ。河内、国日下大戸村とあはえ。此郷のあ
やあらむ。古河内和泉一國あまむ。彼奥津を由るに聞
也。まゝ越中、国新川郡大戸郷あり。万葉二
十小田口朝臣大戸てふ人、名も見えと。●庭津日神。
亦云。庭高津日神。名義庭津火と云ふ。日を借字あは。
師云。庭を家庭の意あるべく。日を産靈の靈ある。ちて此
庭燎此あとおを非じと云ふ。ちて然らび。ちて此

は。奥津日子奥津比賣、二神を併せて謂ひ御名ある。古
事記小別神と爲とあは。謬れる傳あは。其を彼記ふ。奥津
日子神。奥津比賣命。亦名大戸。此者諸人以拜竈神者也と
あまど。下よ引依書等ふ。竈神、齋火、武主比命、庭火皇神を
有て。奥津日子、奥津比賣てふ名を言は交。あま二神此即
庭津日神ある證あるふ。況て古事記ふ。此比古比賣の出
ある條よ。二名を一神とあて。計とあはをも思ふべし。火武
神を火神よ坐せむ。竈所よ必祀べき神あるを庭津日神
は師説の如くは。竈神と云て。竈所よ齋火。あはき由有むや。
此神をれち。上の二神ある故ふ。竈神とて。此御名を奉
あむあり。一神あるが。二神よ身を分ち。二神あるが。一神
ふ身を合せ給ふことと。庭高津日神と白玄御名をも。別
上。次く既よ注ゆき。

神と爲されど。是は多し。高てふ稱辭の加れる此み異ふて。同神あはれと論ひあし。其由下ふ注ふ。第百四十四段 大嘗祭の處見

○諸人た。万葉五ふ。母呂比得。十八う毛呂比登とあ

也。○持伊都久は。既よ上ふ出也。第二十五段 傳見べし。竈神た。師

云竈た加麻と訓ばし。和名抄よ。四聲字苑云。竈炊爨處也。

和名加萬や。何まむあり。今俗ふ。釜を未加麻と云故よ。竈

と思ふ人あれど。然よ非。古た釜を加麻と云。ゆことあ

混ふ。釜を賀那閉ま。末路賀奈倍と。和名抄よ見えあり。思

然も。ある。あはれ。竈と。轉也。とる名ふても有らむ。

ま。加麻度とも云た。竈處あ也。万葉五ふ。可麻度ふは火

氣布はあて。交や詠也。私記よ。加摩斗者梵語也。と云るを

神樂竈殿遊。哥ふ止。与戸川比と見え枕。冊子ふ御。牙おひ
とあり。加麻とを差別。あ也。しう。未思ひ得。あは。俗よ。竈
を久度と云は誤あり。和名抄よ。文字集略云。竈。後穿也。
和名久度や見え。竹取物語ふ。かまどを三重ふ。あは。絶て
くどを。あけてと。あり。然れ。古の竈を。後。了。穴を。開て。そ
を。久度と云し。あ也。さて。窓。字。ハ。字。書。ふ。見。え。あ。若。く。た
窓の。誤。う。窓。は。窓。と。同。じ。竈。突。也。と。注。せ。り。あ。は。大。膳。式。神
よ。害。神。と。い。ふ。有。れ。む。其。と。同。じ。く。て。害。の。あ。や。ま。り。く。神
名式了。筑前。国。御笠。郡。ふ。竈。門。神。社。大。名。神。あ。也。今。云。此。社。ハ
七年。四月。筑前。国。從。五。位。下。竈。神。從。五。位。上。嘉。祥。三。年。十。月
竈。門。神。正。五。位。下。貞。觀。元。年。正。月。廿。七。日。正。五。位。下。竈。門。神。
從。四。位。下。元。慶。三。年。六。月。八。日。授。從。四。位。下。竈。神。從。四。位。上。
あ。ど。見。也。百。鍊。抄。よ。嘉。承。元。年。十。一。月。三。日。宰。府。竈。門。宮。授。
正。一。位。と。見。え。此。時。の。こ。と。中。右。記。よ。も。嘉。承。元。年。十。一。月。
三。日。竈。門。宮。奉。増。正。一。位。本。位。從。一。位。又。有。別。宣。旨。仍。位。記
請。印。記。宣。命。今。度。宇。佐。神。祇。官。使。正。六。位。上。伊。伎。宿。祿。義。成
尔。被。付。云。く。と。云。へ。り。新。統。古。今。集。よ。藤。原。經。衡。哥。の。端。詞
よ。か。ま。ど。の。明。神。や。あ。り。和。字。雅。ふ。御。笠。郡。竈。門。山。上。ふ。在
り。山。を。は。と。宝。滿。山。と。も。云。故。よ。宝。滿。明。神。と。も。稱。也。と。云

牙ゆ、竈門山の哥拾遺集に見えたり。紀伊、国名草郡ふ。竈山、何にて。竈山神

社も式小見也。是も此神ふや。今云此社、今も宮、郷和田村の西南三町許に在とも

紀三井寺の東北一里許の山腹に在とも書等に見えたり。地ふ行て見、祓に詳ふを知らず。あ、布此山の事、神武

天皇、卷日子五瀬命、諸民に炊爨事を教、予賜ひし功ある崩、此処に注ふべし。

神あるばしと有也。ま、師言、此竈神と云、古比賣二神を指るは、比賣神一柱、

定、あらば、舊事紀、此二神者、何をど例、比依、若、二柱を指て、い、此二柱、神者、有、比賣神、

大戸、て、ふ、名も、比賣神、のみ、有、を、竈神、此、一、神、を、の、

み、云、う、然、れ、ど、あ、布、定、の、あ、く、ぞ、覚、也、る、世、俗、此、諺、に、竈、神、

と、女、神、あ、り、と、云、こ、と、此、あ、る、を、漢、籍、ふ、も、然、云、る、事、あ、る、

と、云、出、と、依、り、又、古、と、云、の、傳、う、と、有、を、ど、此、二、神、者、と、

事、紀、の、傳、を、も、安、と、を、言、が、多、し、竈、神、を、女、神、と、云、こ、を、は、

疑、あ、く、漢、籍、を、り、出、と、る、説、あ、り、炊、爨、の、事、を、あ、ら、は、

び、男、女、の、祓、と、る、神、の、為、始、給、ふ、べ、き、事、あ、る、を、や、ち、て

聖武天皇紀ふ。天平三年正月庚戌朔乙亥、神祇官奏、庭火

御竈四時祭祀、永爲常例、と見也。然る、四時祭式、ふ、を、見

え、び、大膳職式、御膳神八座云、醬院高部神一座、竈神

四座云、菓餅所、火雷神一座云、竈神四座云、云、と、切、

と、る、処、を、載、せ、る、文、あ、り、け、て、神、名、式、ふ、を、大、膳、職、坐、神、

の、品、を、載、せ、る、文、あ、り、け、て、神、名、式、ふ、を、大、膳、職、坐、神、

三座、御食津神社、火雷神社、高倍神社、と、舉、て、竈神四座、

竈神四座を漏さま、と、云、大膳職、上、第六十七段、の、傳、ふ、

て、長官、多、大膳、大夫、と、い、ひ、次、官、を、大膳、亮、と、云、ふ、次、

此、官、人、多、り、令、に、掌、諸、固、調、雜、物、及、造、庶、膳、羞、醢、菹、醬、鼓、

未、醬、肴、菓、雜、餅、食、料、率、膳、部、以、供、其、事、と、有、て、大、御、食、物、此、

事、に、預、る、職、あ、る、故、に、御膳神を祭、れ、也、儲、ま、と、其、廳、の、被、

官、に、主、醬、と、て、雜、醬、鼓、未、醬、等、を、造、る、こ、と、を、掌、也、主、菓、餅、

院と云ひ其所は高倍神一座と竈神四座とを祭也。主菓餅の居所を菓餅所と云て其所は火雷神一座を祭給ふ座を祭れり。御食物は預る職あり。此神等を祭給ふこと各其理あり。事は正火雷神一座の事。第十三段に既し注す。御膳神八座と高倍神一座は景行天皇巻ふ注す。さて竈神やある。竈師説ふ。上引る和名抄に竈を同く依べく聞ゆ。れど久度と訓べしとあり。然れど古本に此字も竈とあま。バさも決米難くあり。右四祭春料依前件。秋亦准此。但御膳神二月十日。年毎に春秋に祭有しと見也。されど四時祭はて臨時祭。式は鎮竈鳴祭云く。御竈祭云く。御井并御竈祭云く。中宮御竈祭。東宮云く。ぬぎの。各其祭は料物の品く多載せる文あり。○竈の鳴と云。こせ世は多く聞ゆる事あり。早く有し事あり。其祭式あり。但し此は竈鳴と有れど。世に聞ゆる。釜は鳴とぞ云ふ。拾芥抄に釜鳴と有部を云條ありて。子日愁事。丑日喪事。寅日官事。凶卯日家

喪事。辰日家亡。巳日中吉來。午日鬼神來。未日口舌事。申日同上。酉日同上。戌日大凶。亥日小吉とある。後世の陰陽家の輩は定する事と見ゆ。また漢籍にも楚辭よ見えて。厭勝の術あり。谷川氏云へり。俗に釜鳴ときた。女の湯まきを掛れば止む。おぎも云。免。さて備中。固吉備津宮に釜鳴神事と云あり。此事は孝靈天皇巻吉備津彦命に注す。因此等。大膳職式に見え。と依と別あり。中宮祭。東宮准此。とあるを以て。何所はまれ。竈所ある。文徳天。処にたのれら。竈神。茂祭。給へる事知らま。と。皇紀。齊衡二年十二月丙子朔。大炊寮。大八嶋竈神。齋火。武主比命。庭火皇神。竝授。從五位下。と見え。大炊寮も宮内省官を大炊頭と云ひ。次官を大炊助と云ふ。次官の官人多り。令に掌諸國春米雜穀。分給諸司食料事。と有て。此も御食物は預る寮あり。故に竈神を祭ま。○此寮。大炊寮。式は竈神八座云く。おの云くと切。載せる文あり。右春

祭料依前件冬祭準此と有れむ。年毎此春冬ふ祭有しと

見也。されど此祭の事も四時祭式ふて見えぬはと文徳天皇紀了。天安元年

四月癸酉有勅内膳司忌火庭火神竝授從五位下と見也。

内膳司も宮内省の被管司ふて長官を奉膳とて二人あり。後ふ内膳正といふ次官を典膳と云ふ。次官の官人あり。今ふ奉膳二人。掌惣知御膳進食先嘗事典膳六人。掌造供御膳調和庶味寒温之節と有て此まご御食物予預る司ある故ふ此も此神等を祭れむ。前の大炊寮のとて異れむ。思ひ混ふはらび忌火とて前後より引く文ふ。齋火武主比命と有る是あり。火を殊に清むる故ふ忌火と云あり。○印本写本共ふ勅字の下ふ。ふ大炊寮大八嶋竈と云七字あり。誤あり。其ハ大炊寮此竈神某くは既ふ齊衡二年ふ從五位下を授奉給へ。依ものをや記傳ふ。反りて齊衡二年此文内膳司式ふ。此神の事は見ぢまふ。疑れと依む。委うらび。とも四時祭式ふ。大殿祭の次ふ。忌火庭火祭。中宮云く。お

云くも其祭の料物此品くを載せ。右大殿祭畢宮主於内

膳司行事と有。祭と云くも二所不見えと有り。ちて清

和天皇紀ふ。貞觀元年正月廿七日。大炊寮從五位下大八

嶋竈神八前。内膳司從五位下齋火武主比命神。庭火皇神

等竝授從五位上と見え。師云印本此大炊寮を大膳職

本ふも。大膳職從五位下火雷神大炊寮云くと有と言れ。命と云六字八前の下ふ。錯乱入と有り。今上より引とる。文徳天皇紀此文ども。考齊合せ。文を直して引ぬ。さて此八前を師説ふ。大膳職ふ竈神四座。竈神四座と。中右記あ依字合せてふや有むと云ま。然も有べし。中右記ふ。内膳司御竈神二所也云く。一所庭火。是尋常御飯奉仕神也。一所忌火。是則十一月新嘗。六月神今食祭奉仕神也。

せ見え多也。おの云くと切あるを平野件美御祭奉仕神
けまを捨於二所を師此引れと依三所とあるハ殊も
誤あり然るハ内膳司の竈神此二所もて庭火忌火と申
去ことと上引依天安元年貞觀元年の紀文よて更ふ
論ひあき字やさて二所神此御躰代を師説此如く即の
祢の竈外正と聞也そを西宮記の内膳御竈奉遷他所事
以生絹覆上衛士八人昇之宮主先解除納言一人辨外記
史以下歩行供奉と見え禁祕御抄お竈神行他所之時中
納言以下供奉尤可為聖物女房不忌之男主上之外不沐
浴也四五破但指合用之不可說物也といひ百鍊抄よ室
治二年十月廿二日内膳屋焼凶御竈神焼損給九四日近
日御竈神焼損可鑄改哉否事被問諸卿十一月十九日軒
廊御上内膳竈焼損事也閏十二月廿七日被定内膳御竈
可鑄改日時定來廿八日おど有を思ひ通して辨ふべし
さて其二の御竈此一所を斎火武主比命の御躰として
此字忌火とも申して殊も重みし給ひ新嘗神今食等の
祭の時よ御祭仕奉也一所を庭火神の御躰と志て尋常
此御飯此時よ御祭仕奉る由と聞えたり儲まよ百鍊
抄よ謂也る室治二年の焼損此こぞ増鏡烟此末くの巻

お委く見也。師云竈神を如此く公家おも祭賜ひまご古
披見るべし。諸民までも各祭正しこぞ。諸人之持伊都久と有ふ
てめ知ぼく。江家次第お正月元旦四方拜條庶人儀よ竈
神をも拜むこぞ見也。竈神内傳と云ものよ丙丁日不祭
お足祢ど是よても。けて今世おを三寶荒神おと云穢き
昔祭しおぞ知べし。荒神と云こぞの
名字申ひおいと淺まし死事あるうも。鍊胤云俗よ三寶
由た巫学談弊王女あき等よ委。阿須波神名義師云足
く辨へられと正就て見るべし。○阿須波神名義師云足
場の意よや足を阿須と云お左お引く地名此足羽おと
是れ正。凡て何處おまき人の足踏立依地を足場と云ふ。
今世お言ふも足場の好悪おと云免也。さて凡て場や云
お庭の畧よて大

庭を意富婆と云類多し。まゝと場字をも尔波と訓。おとも
あり。何小まき事を為り地を某場と云。さて某場と云せ
きハ音便了て濁れどぬもと尔波の畧あれむ。波ハ
清言あ也。故此の神名此波を清音小唱ふる也。ちて
此神は人此物行とてても。万此事業を爲とてても。足踏立
依地を守り坐坐神あるが故。家毎小祭しふや。お不次小
云也。今云此神名と次の神名と此意を師の未考得也と
と所思れむ。波比岐神名義師説了。波比入君の意。伊
此は記しお。波比入君の意。伊
は比の韻おる故。本と也省也。まゝ理と美を省け
ぬれぬ。如此き活用の理を省く例多く。後撰集春上。通
ひ住侍也。依人家の前お依柳を思ひや也。躬恒妹が
家此波比入小植る青柳也。今や啼らむ鶯の聲。堀川百首

ふも。柴の屋此波比理の庭おねく蚊火也。煙う依さ死夏
此夕ぐま。是らるを思ふよ。門と也舎屋内お入までの間此
庭を波比入也云しあ也。古言お依也。波比入と也。今世の
言よも入を波比流と云。是れり。波布と也。いさ。う此間
此処を歩き行こせれり。故源氏物語おぞま家内おどよ
て。彼とり此子来るおとあぞを波比渡れど多く云。須
磨浦と明石浦との間を。波比已とる。おぞ。云。こ
ぞ。彼。巻く。見え。と。依も。甚。近。き。と。し。あり。後。世。は。多。く。
虫。お。ぞ。の。行。を。此。み。波。布。と。云。ふ。そ。れ。も。虫。お。ど。を。甚。小
死。物。よ。て。い。さ。く。う。此。程。を。已。お。う。も。歩。く。物。れ。る。故。よ。云。
あ。る。は。く。ま。と。人。も。俯。伏。て。手。と。足。と。し。て。行。を。波。布。と。云。
是。も。遠。丸。を。え。行。れ。ぬ。物。お。ま。む。い。さ。く。う。の。程。を。行。意。よ
巴。云。あり。か。く。ま。む。の。人。家。の。波。比。入。也。門。を。り。舎。ま。で
は。遠。う。ら。ぬ。不。ど。あ。る。故。よ。其。間。を。歩。行。入。る。意。れ。也。○斯
今。云。入。口。を。ハ。ヒ。リ。口。と。云。言。も。あ。り。思。ひ。合。也。也。し。斯
て。此。神。を。其。波。比。入。の。庭。を。守。坐。神。ふ。や。有。む。故。家。お。ぞ。ふ

祭_レし_レれ_レ波_レ比_レ。此、波比入_レ古、然_ルる_レべき家_ニて_モ大庭
処_ニあ_リま_シた_リ家庭_ノ中_ニあ_リ就_テも_モむ_レ祓_トと_モ去_リ
依_ル処_ニあ_リる_レ故_ニ。殊_ニ其_ノ神_ニ坐_スる_レ依_ル。ち_テ万_葉二十_ふ。
上_ニ總_國防_人歌_ふ。爾_ハ波_奈加_レ此_ハ阿_須波_乃神_ニあ_リ小_柴さ_し。吾_ハ
は_レ祝_ヒむ_レ歸_ル來_マまで_ふ。爾_ハ波_奈加_レ庭_中あり_{。袖}中_抄よ。
去_リと_モ云_フる_レハ_レ非_アあ_リま_シと_モ爾_ハ波_奈加_レ此_ハ歌_ふ。庭_中之_トと_モ
を_レ彼_ノ國_ノ地名_ト依_ル説_モこ_トろ_シ。此_ハ歌_ふ。庭_中之_トと_モ
依_ル波_を以_テ。當_時民_家の_庭よ。竈_ニ神_ニあ_リど_ク共_ニあ_リ。此_ハ阿_須波_比
神_字も_祭レ_しま_シや_知ば_し。偕_ニあ_リ此_ノ神_を祭_ルう_レ牙_ハ波_比
岐_ノ神_字も_同く_祭レ_らむ_{。然}る_レも_取分_テ阿_須波_乃神_ニと
べ_シ。行_前く_足ふ_レ立_{。ち}て_右此_ノ歌_ハ末_ニ二_句を_味ふ_{。彼}
依_ル地_を守_ル坐_ス故_{あり}。阿_須波_神己_ノ家_ニあ_リは_レ非_デ。行_前の_宿く_此家_ニ祭_レ

依_ルを_祝ひ_おく_{。行}む_トと_依れ_まむ_{。何}國_ニあ_リても_モ家_毎ふ_祭
祭_ルこと_知られ_ぬ也_{。或}書_キ攝_津國_河邊_郡阿_須波_神祠_祭
神_を祭_ルま_シる_レあ_リ依_ルべ_シ。け_テ万_葉九_ノ河_内よ_{。片}足_羽川_あ
れ_どあ_リ加_多志_波川_{あり}。今_本訓_誤れ_ばは_レと_和名_抄よ_{。誤}
備_中國_後月_郡よ_{。足}次_阿須_波と_あま_シと_モ武_射郡_邊よ_{。行}
れ_依あり_{。○}鏡_胤云_ふ已_の頃_上總_國武_射郡_邊よ_{。行}
お_り里_人の_門内_よ。已_の頃_上總_國武_射郡_邊よ_{。行}
作_レて_其屋_根を_棄て_葺と_依る_レ所_ニあ_リ見_ゆ依_ルあり_{。奇}形_を
思_ひて_其郷_人大_高秀_明の_跡を_祭レ_らむ_{。必}加_クして_朝毎_日家_祭
依_ル人_ハ伊_勢參_宮し_とる_レ跡_を祭_レら_む。必_加ク_{して}朝_毎日_家
茶_あど_供ふ_るあ_リ何_レ依_ル神_を祭_レら_む。必_加ク_{して}朝_毎日_家
ぞ_レ此_レ邊_ニ然_レ依_ル習_ひあり_{。と}云_ふと_モ決_て阿_須波_比
波_神を_祭レ_らむ_{。依}れ_まむ_{。加}く_て近_き國_ニあ_リ決_て阿_須波_比
さ_るよ_{。同}じ_様に_依る_レ處_もあ_リと_モ云_ふと_モ弥_古の_遺風_祭
依_ルあ_リま_シ但_し伊_勢參_りお_り重_みして_然レ_ば神_參レ_ば
依_ルあ_リま_シ恙_{なく}と_モ殊_ニ重_みして_然レ_ば神_參レ_ば
○座_摩之_御巫_之云_ふ。舊_く座_摩は_章賀_須理_御巫_は美_加

牟能古と訓來れ也。神名式も座摩巫祭神五座。並大月生
井神。福井神。綱長井神。波比祇神。阿須波神。と出給り。座
摩てふ由緒。まこと此御巫の持齋モチイサこぞ外ぞ。御井神の處も
委く注ばし。第八十八段此傳見べし。神名帳も伊勢抑こ
此二柱神をかく御井神と一處も祭給り。師説此如
く。共ふ人此家庭も就る神等おれむ外也。貞觀儀式延喜
大嘗祭式おどを考るよ。悠紀主基此兩國各齋郡も齋院
と云を構へて八神殿を造也。八柱神を祭らる。其中も
此二柱あり。委く七第百四十四段大嘗祭の處も注ふ見べし。おは師説も此齋
院も御稻拔穂此料ある故も波比岐神も其波比入の庭

を守り坐し。阿須波神も拔穂を京も運送るまでの種も此
事を行ふ足場を守り坐さぐ爲も祭らばくおゆるし。是を
も二神の名義も右の如あらむ。と思ふあり。或説も此
二神をも龜神ありと云も非あり。其も別も上も龜神也
とある。残やまも龜神ありと云も就て波比岐を灰木の
意ぞおと云もいよ非あり。灰木と云ふこと此有らむ
や。はと神名式も越前國足羽郡も足羽神社あり。此も就
も思ふるもか此座摩御巫祭神五座も本継躰天皇の越前
も坐し時其國もて殊も等崇給ひし神もちを御位も即
給ひて後京城も祭ら給ひしと傳は也。後此坂井
京も同じおと祭ら給ひしと傳は也。越前國坂井
郡も坂井神社も今福井と云處も若然らむ。綱長井も
彼も郡都那高志神社も名似たり。若然らむ。攝津國座摩
も孝徳天皇の難波宮も坐し時彼五神を祀らせ給ひし
跡もある。然らむ阿須波も坐し時彼五神を祀らせ給ひし
と依神名あり。波比岐も坐し時彼五神を祀らせ給ひし
有し神社あり。波比岐も坐し時彼五神を祀らせ給ひし

羽社も此の阿須波神を祀
れるも此と思ひおす也。越前足羽社記曰古者男太迹
天皇居於坂井郡三箇之地焉。於是鎮祭大宮地之靈故呼
足羽以爲地名也と云牙依。此説古き傳と聞也。大宮地之
靈を鎮祭とは。此の阿須波神を祭給ふを云れ也。今云足
和名抄よ安須波とあり。男太迹天皇と云。繼躰天皇の大
御名あり。此社記云神名式考證も引とり。大宮地此靈
と云阿須波神を云せ言れしも実然る説あり。其云此神
を祭る祝詞よ皇神能敷坐下都磐根尔宮柱太知立云々
せ云依もて知へし。さて足羽神社の古史よ延暦十
年四月乙巳。敎越前國足羽神從五位下。仁壽元年正月癸
卯。加越前國足羽神從四位下。おと見也。考證よ古記云天
慶三年五月十五日。奉授越前國正四位上足羽神某位と
ある也。何あ。香山戸神師云香を加賀戸は斗と訓也し。
香字を加賀の二音は用ゑる例ハ古事記よ伊迦賀色許
貴とある也。書紀よ伊香色謎命と作き書紀よ伊迦賀色雄

とあるを古事記よ伊迦賀色許男とあり。ま香山香坂
王あざの香字も音を用ひとるよ。加具加基の仮字と
せ。但し香を稱せ依由未思ひ得補せ。若くを稱名ふて
光曜く意う。日照あど云例も有れむあ也。香山を山名と
か。山戸は山れる民の居所ふて。謂也依山里れ。戸は借
字ふて處の意あり。漢籍よ民家を戸と云故よ戸と訓て
字よ依き依物れ也。古さる法をあしはと幣と云云。上代
了た。多。竈のことあ依字。即それを民家のあやよ云云。
や。後此あやれり。然れむ此の戸字を。はまむ此神は山
幣と訓も己ろし。思ひ混ふべら。び。はまむ此神は山
里を開きて。民れ居ほき處を成給へ依功德あ也。けるふ
や有らむ。○羽山戸神師云。羽を速ふて美稱あり。山の夜
る故よ夜を省。香山戸と同じ功德の神あ依ほし。山津見
と波と云あり。香山戸と同じ功德の神あ依ほし。山津見

神と云もありて、羽山の字を同じれぬ。○大山咋神。亦名、
ぎ、意を異あり、思ひ混ふる事勿ま。

主、神師云咋とを、亦名此大主を同意よて、其山小主はき

坐意ふや、はと山了末と云を麓を山本と云よ對ひて。上

方のかやれ也。大祓詞小。高山末短山末を見也。万葉十三

ふ。三諸は人此守山本邊を馬酔木花開き。末邊を云くれ

ぞの也。濱松中納言物語よ。何を多のみ処よてりはいと

むと。但し此の山末は地名ふても有むりし。○日枝山小坐とを、神名式よ。伊

勢、固度會郡。近淡海、固和名抄よ。近江知加津阿不三とあ

る。後人の加牙と云まぬり。○日枝山小坐とを、神名式よ。近江、固滋

賀郡小。日吉神社。大。名神。と何は是か也。師云小右記よ。比叡

社、僧都実因比叡社了てをみ侍れ。後、蘇ぎうくる日枝の

社、の也。ふどに死草のかきむも言や免て死け。ゆて後、世

余志と唱へて、別あるが如く小あま也。古、在日吉と書る

も、比叡了て、比余志や云る。古、在日吉と書る。古、は

須美能延よて、須美余志と云を、無也。し、同じこと

あり。まよ最澄僧此山よ佛寺を建て、此神をも、其寺の守、

神の如く小れして、山王と云名多さ。牙小買せ奉り、扱を

牙、今、世子至り、その比余志と云名、清和天皇紀小。

貞觀元年正月廿七日。近江、固從二位勳一等比叡神授。正

二位。從五位下小比叡神授。從五位下。次よ引く文よ依ま

脱よ。陽成天皇紀小。元慶四年五月十九日。奉授正二位勳

也。神名式ふあ。日吉神社とのみ云て、幾座と云、げれど
吉、神紀の文より依れむ二座あり。然るを臨時祭式ふ日
比、座は式外の神と見ゆ。と云れ、於まど一坐とあるハ二
座を誤れる。師云後世ふ日吉七社を申はむ。古書小見然
物と見ゆ。其七かの最澄が延曆寺を建する時々の所
あをれ也。為と見えたり。三代実録延喜式あどを彼よ
後あまぎも。ちて其七社の中ふ。大宮と申はむ。大山咋神
古ふえり。からむを思ふ。或書小大宮は大比叡明神ふて。大物主
神れ也。二宮を小比叡明神よて。地主と號はと云也。小比
叡神を地主を申はむを思ふ。あれ大山咋神からむ。今
日吉社秘密記と云物。大比叡大明神。從三輪臨幸之時
代。天智天皇。白鳳二年三月。上巳。於大津。八櫛濱。有臨幸。召
海上。漁舟。田中恒世。教可送我。唐崎。松下恒世。畏而白可乘
漁舟。則於船中。仰曰。我可備御料。於是。有粟飯奉之。御舟漕

著。唐崎之浦。等神上。陸仰曰。恒世乘舟之送。粟御料之懇志
至也。汝為報謝。每年可有神幸。此處傳子孫。可來恒世。畏而
言上。御神語。忝過分也。必可致參。勲歸大津。八柳濱。畢。等神
者。唐崎。琴御館。宇志。几宿。祇亭。庭前。之松下。在臨。著言曰。吾
等。神答曰。我者。從三輪。來至此。處。上。給。松。梢。于。時。宇志。白
言。於。乾。山。下。有。勝。地。在。神。幸。我。建。神。殿。可。奉。成。迂。宮。等。神。忽
然。去。給。從。唐。崎。著。給。比。叡。過。登。石。占。井。此。處。女。人。為。占。手。等
神。對。女。人。問。曰。我。鎮。座。之。勝。地。有。何。方。否。女。人。占。曰。從。此。當
山下。有。勝。地。可。尋。往。給。以。此。處。之。井。水。洗。御。足。号。石。占。井。此
女人。号。石。占。井。大明神。等。神。從。石。占。井。到。波。止。土。濃。持。給。御
杖。差。此。地。給。早。生。付。為。柱。木。青。葉。萌。出。琴。御。館。尋。上。觀。之。御
杖。桂。青。葉。依。建。寶。殿。奉。成。御。迂。宮。大。宮。是。也。と云。ひ。ま。と。二
宮。小。比。叡。大明神。地。主。神。也。山。末。社。琴。御。館。宇。志。九。神。位。也。
本。因。常。州。鹿。島。郡。神。皇。產。靈。等。子。活。魂。命。未。祝。部。氏。也。每。年
第。二。申。日。幸。唐。崎。之。砌。以。粟。御。供。參。勤。上。古。未。代。社。例。也。恒
世。之。子。孫。參。向。之。事。也。桂。木。神。木。之。隨。一。也。御。垂。跡。之。始。差
給。御。杖。也。故。祭。禮。日。內。陳。進。上。則。社。家。中。一。枝。宛。冠。角。差。之。
七。社。神。輿。以。之。莊。嚴。諸。人。頂。戴。之。又。有。号。猿。塚。穴。通。唐。崎。穴
也。云。猿。老。果。後。入。此。穴。不。出。由。也。奇。特。此。事。也。當。社。之。仕

者奇妙、働古今不可勝計、おど云子正、日吉社の事記せる
書いと多うれど、此書むり委きた見、例此安説ども
七殊子多ある中、然も有、思也、依、例、を、摘、み、て、此
小記し於師の引れ、或書の説とも符へり、此、傳、あ
依事ある、後、最澄法師、延暦寺を建、る、時、お
大己貴神、七名を取、て、七社を作、西、上、天、台、山、の、守、護
戎付、て、各、本、地、佛、戎、さ、り、付、と、依、西、上、天、台、山、の、守、護
神を、金、毘、羅、神、と、云、由、了、て、大、宮、神、を、其、小、配、て、金、毘、羅、神
とも、号、と、る、由、山、家、要、畧、記、と、云、多、始、於、彼、方、此、書、等、小、見
え、あり、是、と、り、大、己、貴、神、を、金、毘、羅、神、と、申、此、大、己、貴、神、小
今、時、於、彼、の、讚、岐、國、の、金、毘、羅、神、と、云、も、実、を、大、己、貴、神、小
坐、と、し、彼、の、事、記、せ、る、物、小、見、え、と、り、此、小、就、て、思、へ、む
延、暦、寺、此、中、等、小、藥、師、と、云、小、置、る、も、大、己、貴、神、の、病
を、療、治、方、を、初、免、給、り、る、故、事、を、正、や、思、ひ、付、ら、む、然、る
は、彼、が、立、と、依、法、小、中、等、小、釈、迦、を、こ、そ、置、け、け、ま、と
ま、然、依、り、彼、佛、を、置、と、依、も、意、か、く、て、有、ら、免、や、も、儲、ま、と
別、小、中、七、社、下、七、社、と、云、も、有、て、合、せ、て、二、十、一、社、と、云、ふ
其、下、七、社、の、中、小、山、末、社、と、云、ふ、此、名、お、く、小、由、あ、正、然、

ども僧の、徒、い、か、よ、心、の、ま、小、為、れ、む、と、て、も、さ、は、ぐ、小
古、よ、正、此、山、主、は、き、坐、神、を、さ、ば、り、未、く、よ、は、と、も、置、
奉、ら、じ、と、思、は、る、れ、む、上、七、社、此、中、小、て、坐、法、し、と、ぞ、思、
を、依、り、○今、云、下、七、社、此、中、あ、る、山、末、社、と、云、は、琴、御、館、宇
志、九、お、依、由、秘、密、記、小、見、え、て、既、小、奉、と、正、但、し、抑、二、十、一
其、社、名、は、此、お、依、神、名、を、思、ひ、て、ぞ、付、ぬ、り、む、抑、二、十、一
社、小、佛、さ、ぬ、れ、み、ふ、て、宗、と、有、べ、き、古、の、神、社、を、其、中、小
何、ま、小、の、と、尋、ら、は、く、む、か、正、埋、れ、賜、ひ、終、依、は、甚、も、淺、ま
志、死、事、お、正、れ、ゆ、凡、て、此、御、社、の、お、と、は、後、此、書、ど、も、小、く
寺、小、因、て、弘、免、來、と、依、事、此、み、お、ま、む、取、り、足、ら、ぬ、後、世、小
ガ、の、公、事、根、元、小、比、叡、山、の、神、を、松、尾、社、と、同、躰、小、て、大、山
昨、神、と、記、し、給、へ、依、む、古、○葛、野、ハ、師、云、加、豆、奴、と、訓、法、し、
書、小、依、て、実、の、こ、と、ぬ、り、○葛、野、ハ、師、云、加、豆、奴、と、訓、法、し、
明、宮、段、此、大、け、て、垂、仁、天、皇、紀、小、竹、野、媛、者、因、形、姿、醜、返、於、
御、哥、小、見、也、
本、土、則、羞、其、見、返、到、葛、野、自、墮、輿、而、死、之、故、號、其、地、謂、墮、罔、

今調^ス第^ニ國^ノ訛^ト也。と有^ルを思^フ牙^バ。古^ク乙^ニ訓^シ郡^ノ邊^マまで^を泛^シ。
く葛野と云しれり。和名抄ふ。山城國郡葛野加止乃。ま
葛野郷も見也。加豆^{カヂ}も葛字を用^ヒとる。久豆^{クヂ}を加豆^{カヂ}とも
野^ノと云^フ。加豆^{カヂ}の轉^ルれり。字音を取^ル依^ルは非^ズ。後^ニ加^フ。野^ノ
の葛飾^{カヂ}は音を取^ルれ。例^ニ異^リあり。○松尾^{マツノ}を神名式^{カミナマシ}ふ。山
城國葛野郡小松尾神社二座。並名神大月^{ナミカミ}とある是^カ也。
江次第^エ第^ニふ。大宝元年^{タウホ}秦都理^シ始^メ造^ル立^テ神^ノ殿^ヲ。天^ノ平^ノ二^ノ年^ニ預^メ大^ノ社^ト
とあり。始^メ造^ルと云^フへることい^フ。其^ノ乙^ニ以前^ニも神^ノ殿^ヲ
あり。るべきも非^ズ。れ。乙^ニ其^ノ時^ニ新^メ造^ルて美^ク造^ル奉^シを云^フ
みや。天平云^フ。乙^ニ然^ルも有^ルべし。さて此^ノ一^ノ座^ニ乙^ニ或^チ若^ク山^ノ咋^ト
神^トも申^ス。或^チハ市^ノ杵^ノ島^ノ姫^ノ命^トも。此^ノ御^ノ社^ハ師^ノ說^ノの如^ク。
申^ス。或^チ乙^ニ玉^ノ依^ル姫^トも申^ス。れり。古^ク乙^ニ然^ルしも佛^ノさ^ニ乙^ニ混^ルら^ル故^ニ。今^ニ至^ルまで。大山^ノ咋^ト
神^トは乙^ニ多^クの^ノ傳^ヲ申^セ也。儲^ノ國^ノ史^ニ乙^ニ延^シ曆^三年^十一^月丁^未

已遣^シ兵^部大^輔從^{五位}上^大中^臣諸^夷敘^松尾^乙訓^二神^從
五位^下以^遷都^也。遷^シ都^ト乙^ニ長^岡宮^ニ遷^シ坐^玄を云^フ乙^ニ訓^シ也。式^式
あり。此^ノ神^ト松^尾神^ト由^{アリ}あり。同^五年^十二^月辛^巳敘^從五^位
乙^ニ神^武天^皇卷^ノ見^エと^也。同^五年^十二^月辛^巳敘^從五^位
位^下松^尾神^從四^位下^也。從^五位^下より越^シ階^シて從^四位^下
延^曆十^三年^十月^丁卯^鴨松^尾神^加階^以遷^シ都^也とあり。此^ノ
乙^ニ今^ノ平^安宮^ニ遷^リ坐^玄を云^フ鴨^神と由^{アリ}あり。事^モ神^武
天^皇卷^ノ見^エと^也。承^和十^二年^五月^庚午^奉授^從四^位上^勳二^等松^尾
見^エと^也。尾^神正^四位^下餘^如故^也。此^ノ文^ヲ見^レれ。乙^ニ紀^畧乙^ニ延^曆十^三年^給
給^ヘ依^ル也。同^十四^年七^月己^丑奉^授正^四位^下勳^二等^松尾^給
大神^從三^位餘^如故^也。乙^ニの^時も正^四位^上を越^シ階^シ給^ヒル^也
折^木雨^亦降^入夜^弥猛^丁酉^遣使^奉幣^於松^尾大^神祈^之甲^寅
寅^霖雨^止息^先是^左相^摸司^伐葛^野郡^家前^槻樹^作大^鼓有^也

崇由是奉幣及鼓於松尾大神以祈謝○用。嘉祥二年三月
鼓牛皮十二張一面六張と云ことも見ゆ。壬辰勅從三位松尾大神禰宜等預把笏之例。此社の祿宜
秦都理より相續き來りて。仁壽二年五月甲戌加山城國
今ハ三神主とされ正とぞ。松尾神正二位貞觀元年正月廿七日山城國正四位勲二
等松尾神從一位同八年十一月廿日進山城國從一位勲
二等松尾神階加正一位おど見ゆ。此神をかく重く御あ
事あり神武天皇卷多披見て知るを扶桑見聞私記よ
信濃國今溝庄松尾社領とあり然まバ諸國よ其神領
聞えと正。はと王葉ふ建久二年十二月七日松尾行幸神
寶御覽寶殿二所云く一所金銀幣一具無御鏡是男體之
故也。又女體之御劍不付平緒と正。此文よとれぬ男體
神ふと御鏡を置ま

此女體神の御劍了た平緒を付ざること故実と聞えと
正。儲まと金銀幣を置ことと早く有し事お正なり。れ
不考ふ。行幸此始を後拾遺集ふ。一條院御時始免て松尾
此行幸侍々依ふ歌ふべき歌おけり奉けふ源兼澄干
早振る松尾山の陰見まむ今日ぞ千年の始お正け依。亦
此神を用鳴鏑神也と云ふこと正。其神
武天皇卷よ記せまバ其処ふ注ふを見と。大土神。亦
大土之神師云。こは殊よ民此佃依田地おせ此土のおとふ
御祖神。功德あ正し神お正。然まば大土お係るふ非也。此神よ
係る美稱あり。亦名の意も同じ。万葉十一。大土採雖盈
おまむ此と。○度會。伊勢國度會郡お正。此地を度會と
意異れり。云ふ由。神武天皇卷ふ見ゆ。○地主神。登許奴志能神

と訓^レば^シ。地を登許と訓るに倭姫命世記に地口てふ語
多^クり其文を神祇本源より引とるふトコグチ
を訓る処あり彼書の出来し頃まで有し古言と聞
えとり今世も登許呂を登許とのみ云こと多し。登
許呂戎登許と云む呂の省かめと依言と思ふは委のら
び登も許も共ふ所字に義を依^ル。火^カ火^カ所^カ其^カ知^カ此^カ所^カあ
其^カ二^カ言^カを重^カねて登許と云ふ。其^カを麻^カも佐^カも共^カよ真^カの義
の如^ク呂^カてふ辭^カの黍^カま^カ依^カる^カ也^カ。其^カ呂^カハ野^カ良^カ峯^カ呂^カあ^カぢ^カち^カて
地主とは字に如く其地地主を依^ル由^ル也^カ。凡^カ本^カ大地^カ主^カ神
此處小註を見^ル也^カ。第七十八段 神名式ふ伊勢國度會郡
ふ大土御祖神社也^カ。一本小御祖二字 此を大神宮式ふ
大神宮所攝二十四座の中ふ大土御祖社とある社^カ了^カ。

預^レ祈^レ年^レ神^レ嘗^レ祭^レと見え延曆内宮儀式も大土神社一處。
稱^ス國^{ナリ}生^シ神^ニ兒^ト大^ニ國^ニ王^ノ命^ト次^ニ水^ノ佐^ノ良^ノ比^ノ古^ノ命^ト次^ニ水^ノ佐^ノ良^ノ比^ノ。
賣^ル命^ト。形^石石^ニ倭^ノ姫^ノ内^ノ親^ノ王^ノ定^メ祝^ヒと^レ也^カ。常^ノの本^カよ比^カ賣^カ命^カの水^カ。
祕^書書^ヲ引^クよ依^テ補^ヘり其^カを伊^ノ勢^ノ風^ノ土^ノ荒^ノ木^ノ田^ノ經^ノ雅^ノ御^ト。
記^スも弥^ノ豆^ノ佐^ノ良^ノ比^ノ女^ノ命^トと有^レれ^ル也^カ。
此^ノ解^スふ當^ル社^ハ宇^ノ治^ノ郷^ノ尾^ノ崎^ノの東^ニ御^ノ常^ノ供^ノ田^ノの西北^ニ此^ノ川^ノ岸^ニ。
よ^レ也^カ。神^ノ名^ノ畧^ノ記^ニも在^リ宇^ノ治^ノ郷^ノ楠^ノ部^ノ大^ノ土^ノ御^ノ祖^ノ社^ト云^ヒ。
末^ト一^ノ名^ヲ所^ノ御^ノ社^トも云^フ。土^カを地^カあり地^カを即^カ登^カ許^カ呂^カあ
事^ニ二^ノ月^ノ十^ノ一^ノ日^ノ條^ニも大^ノ土^ノ社^トも所^ノ御^ノ社^トも何^カ比^カを
をいふあり昔^ハ國^ノ郡^ノ司^ノ正^ノ税^ヲを以^テ作^ルま^スる^カ何^カ比^カを
也^カ此^ノ式^ヲを失^ヒ社^ノ地^ノのみふて社^カも絶^エ依^ルを寬^ク文^ノ年^ノ中^ニ造^ル
よ大^ノ宮^ノ司^ノ精^ノ長^ノ朝^ノ臣^ノ古^ノ式^ニ此^ノ如^ク再^レ興^スの^カ此^ノ宮^ノ司^ノと^レ造^ル
ら^レ替^ハ國^ノ生^シを玖^ノ奈^ノ利^トと訓^レば^シ今^も志^スる^カ唱^ル來^ル也^カ貞^ノ觀^ノ二^ノ年^ノ。

紀ふ信濃國正六位上國業比賣神と云も有まむなり。玦奈利を國業字の如く。國人の産業を始免教と流由ふて。大年神うと言れしは實然る説あり。此餘は説あれど。其は大國王命を有む。大土神あはれと。大土御祖神社とも。大土神社とも云て。其祭神を大國王命を有ふて明く。其御親神をまむ。國生神と云は。大年神あはれと。是亦論ふ。大土神を大國王命を云多疑ふも有む。此を師説ふ。此大國王命を國生神の兒ふて。此國を經營給ひし神あり。王を聖して其國を經營し功ある神を某國魂と云ふ。大國王と云社諸國あり。神名式を見て知へし。然るに大國王といふは皆大己貴神あり。天下此大國王あり。所ふはしき説あり。大己貴神を天下此大國王あり。所處をも其國と云へゆと有ふて知るべし。女神ふて國王

と負へるも一柱あらばの依字や。はと此ふ就て猶考ふるふ。國生とは大年神を國地ふ稻比生出依業を始給ふ依故に稱せる御名ふも有はし。上は大年と申出御名の意を次水佐く良比古命。次水佐く良比賣命とある二神のまをば。神武天皇御世ふ。此の大國王神御形を現し給ふる事あり。其巻ふ云む。度會此地主と坐り事も。其巻ふて明白ふ知らは。その御卷のちて倭姫内親王定祝とは。垂仁天皇此御代ふ。天照大御神を伊須受能宮に祝定免坐る時ふ。此御社をも定祝ひ給ふる由あり。法を垂仁天皇巻さる内宮年中行事ふ。六月十六日。曉玉串。大内人參。大土神社供御膳。

則歸參本宮。件御供米當社御戸代米而まご九月十六日、
曉玉串大内人參大土社供御膳於彼神。是新歸參本宮は
と十二月十六日、曉玉串大内人參大土神社供御膳如六
月勤あどほ。玉串大内人。宇治土公あ。此大土御
祖神を申は。や。て猿田毘古大神ふて。其孫は大田命
あ。は。て宇治土公氏は其裔ある故。此祭子預るあ。
内宮後式解よも此事を奉て。あ。當郷の圍魂あまむ。土
公をして祭らあむ。あ。依。と。言ま。於れ。と。委。ら。は。
猶此事。下ふ次。注を見。知。し。第百五段。此傳。神武
此傳あ。は。て倭姫命世記。内宮所攝神の處。右社を
見。へ。し。載。さ。は。外宮所攝神の處。土御祖神二座。東向宇迦之御

魂神。御形室土乃御祖神。御形と載せ。ま。と。御鎮座傳記。
土御祖神二座と載して。注よ。宇賀之御魂神一座。土乃御
祖神一座。亦。衛。神大田命。神室石。宝形一面坐。是神也。と
あり。但し。此記。宇賀之御魂神を大年神子。大圍御魂神
子と云。る。痛く。謬れる。説あり。ま。と。御鎮座本記。の外宮
鎮座の事を云。する。處。よ。も。宇賀魂神大土祖神大田命を。
山田原之地。護神と定。祝。奉。也。と記して。注よ。宇賀魂神。瑠
璃壺坐。大土祖。聖鏡坐。大田命。聖銘石坐。也。と。ほ。り。て。傳記
あ。大田命云。神也。とある。石。宝形を。加。り。て。三座とし。
大田命。聖銘石坐。と云。へ。れ。ど。本。を。神。也。と。記。し。て。非
ざ。り。し。を。大田命。よ。由。緒。あ。る。物。や。有。ら。む。彼。命。の。聖。實
と。為。り。と。聞。也。此。も。と。聖。実。あ。ら。ぬ。こ。と。麗。氣。記。も。
此社を奉て。在。神室。名。石。一面。日象。扇。一枚。や。さ。八。云。を。
や。ま。と。宇。迦。之。御。魂。神。の。御。形。此。室。瓶。を。も。本。記。よ。瑠。璃。壺
坐。と。ほ。り。瑠。璃。を。漢。言。あ。ま。む。此。御。聖。代。を。さ。る。趣。小。見。也。
あ。青。玉。の。壺。延。曆。外。宮。儀。式。高。宮。祭。供。奉。の。條。よ。大。宮。地
神。爾。湯。貴。神。酒。一。缶。仕。奉。と。ほ。る。は。此。社。此。事。あ。は。由。度。會。

延經の神名畧記よ云るは。然^ナ依言あ^ハ也。ま^ニ社^ニ多賀宮の山麓^ニ在りと

同書よ。諸ま^ニと神名祕書^ニふ。此社の事を。土宮三座。山田原地主^ニ在

神宮^ニ与^テ高宮^ニ中間^ニ東向^ニ坐^ス。少^ク有^リて。大治三年六月五日。官符改社號^ニ爲^ス宮。

預^ニ祈^ニ年月次神嘗祭幣也。是宮川堤爲^テ守護神也。保延元年

遷宮之時。造宮使親章造進之^ト見え。度會清在^リの倭姫命世記抄^ニ。

祖神^ト稱^セるを宮川の水難^ニ由^テ其堤^ニ守護^ス此爲^ス。本宮^トり申請^スふ^ニ任^セて。崇徳天皇の大治三年^ニ小宮号

宣下^シあ^リ也。造宮使^ニ仰^セせ^テ。宝殿を増造^リ。祈年新嘗月次

等の祭幣を奉^リ。神宮^ニ祭^ヒ始^ムる事を。神名祕書^ニ保

延元年とあ^リ。そ^レは長承四年^ニあり。長秋記^ニ小長承三年六

月^ニ廿一日の処^ニ。豊受大神土宮^ニ彼^レ外宮^ニ地主神也。而^{シテ}年來

無^ク預^メ官幣^ニ而^{シテ}今度^ニ准^テ七所^ニ別宮^ニ可^ク預^メ官幣^ニ之^ニ由^テ自^ラ本宮^ニ依^テ申

請^ヒ已^ニ蒙^リ裁許^ス仍^{シテ}重^ク申請^ス云^フ。御殿之高^ニ五許^ニ尺也。而^{シテ}准^テ七所^ニ別

宮者^ニ毎年荷前幣物^ニ可^ク納^メ御殿内也。件幣物^ニ廿年^ニ遷宮^ス外無

取出事者^ニ不^レ大造^ス御殿^ニ件者無^ク可^ク置^ク之^ニ処^ニ者^ニ准^テ内宮^ニ荒祭^ス外

宮高^ク宮等^ニ可^ク被^テ造^ス此御殿^ニ一丈許^ニ有^リ何^レ難^シ哉^ト云^フ。と有^リとい

可^クる^ニ神祇本源^ニ。社記云^フ。大治三年六月五日。宮号宣下^シ。

爲^テ度會河堤守護也。長承三年^ニ仰^テ造宮使^ニ被^テ増作^ス宝殿^ニ畢^テ預^メ祈年新嘗月次等祭幣^ニ神宮始^メ祭^ヒと有^リ。お^ハも^トく符^ニへ^テる説

あ^リ祭神^ニ大^ニ年神一座^ニ。靈^ニ御形^ニ宇賀魂神一座^ニ。靈^ニ御形^ニ土御

祖神一座^ニ。靈^ニ御形^ニ大治以後加^フ一面也。ま^ニ上^ニ件^ニ大治三年

とある時の事^ニよ^テ大^ニ年神の靈^ニを鏡^ニお^ハ坐^セて加^フ祈祭^スれるを云^フお^ハ依^テべ^シ。建長文永遷宮之時。留璃壺^ニ竝^ニ本

有^リ違例^ニ。即^チ留璃壺^ニ露^レ顯^ル就^テ中文永正遷宮之時。留璃壺^ニ竝^ニ本

鏡二面奉^テ遷落之間^ニ御體奉^テ仕^メ物忌^メ父康村爲^テ久等^ニ被^テ解^リ任^セ己^レ了^ルと^ハあ^リ也。本鏡二面^ト大^ニ年神土御祖神の御靈^ニを

お^ハ裏^ミて露^レさ^レ然^レ定^ムある^ニ其^レを顯^ハし^テ正^ニ遷宮^ス此^レ時^ニも^ハ其^レ御靈^ニを遷^シ落^シ奉^リゑ^ラむ^ハ不^レハ^シ解^リ任^セられ^ルむ^ハ然^レも有^リべき。け^レて此宮^ニを外宮儀式^ニふ。大宮地神^ト云^フひ。長秋

記ふも地主神也と有れど御鎮座本記ふ外内鎮座の事を記せ依處ふ山田原の地護神と定祝へる由云牙依を。案よぞ有る。其を大土神は元と度會此地主坐る故ふ。内宮鎮座の時よ。宇治郷ふ祝奉られし例よ。山田よも祭られし成法し。然るを記傳よ。宇治郷ふる大土御思誤らまじあり。彼を式内此を式外よ。はて相殿ふ。宇郡を同じ度會れまど。処は異なる物もや。賀魂神を祭れ依を。大土神と申せば。殊小民の佃依田地。此事ふ就て。宇賀魂神よ由有れむ也。但し外宮此書等須佐之男命の御子なりと云依ハ古事記の誤る傳よ。依まゝ非説ふぞ有る依其を第十一段此徴よ云依を見。知し。◎稻依比女命名義依を余呂志の約れるふて。御親

大年神の御業を助けて。稻の事小功德あてし故よ。稱よ依御名あるるし。倭建命此御子よ。稻依彌神社。大年神兒稻依比女命形石坐。之何也。經雅卿云。加努彌を鹿海あて。倭姫命世記ふ。皇女大御神を戴奉て。二見を也。幸行の時ふ。苗草戴く者女參相へり。汝を何をう爲せ問を以時。吾は苗草を取る女。名を宇遲都日女と申以時ふ。ま何り如此云依と問し給へば。此因は鹿乃見哉毛爲と申以。其處を鹿乃見哉號依由記せ也。今云藤本久葛説よ。鹿乃爲あり。或人此説の鹿乃見哉毛爲と云ことを詠る。処うら海士の苗草と也。ふかくのみやもゆるみ於むとむまで。即そ此地名を社號とせり。東鹿海村。西鹿海村と二村分て。此二村の

中を宇治川の水流るあり社を西鹿海村の氏神此東
方田中不在り森此みみて社也即宇治郷あり○今云
あ不解み稻依比女と云を世記ある宇遅都日女此別名
ふやと云れしむいかく大歳神の兒とあるものをや

○千依比賣命内宮儀式久麻良比神社一處稱大歳神

兒千依比賣命形石倭姫内親王定祝とほ一本よ千依比賣の上よ

命とあり千依比古經雅神主云大神宮式ふ當社見えびて朽羅社

を加とほ或人一社兩名あるはしと云朽羅社在田辺郷原村よ在て

俗よ宮田森と云ふ大神宮式所撰二十四坐云名義千は

云朽羅社云右諸社預祈年神嘗祭とい牙也

數多兒を云牙ば稱美の詞あ也與利を與呂志の義あ也

古事記よ五百依比賣佐く津比古命内宮儀式了葭原
かど有をも思ふべし坐又宇加乃御王御祖命

形又伊加利比女形とほ也經雅神主云神名式ふ伊勢國

無度會郡ふ荻原神社也云是あ也此よ依て衰藝波良と訓

葭も共よ阿志と訓む何りまを葭原荻原同訓と見也

社地也度會郡奥定村り九里許せま也不在り或説よ

此葭原社を宇治中村月夜見宮の南の小き森よ小社あ

也是あらむと云へど已ろし此を此辺を伊加比と云と

り葭原社を坐伊加利比女此伊加此儀式奏上の頃也

利の訛れらむと心得てかく云り

未入官帳社あまを天安二年紀ふ二月丙戌在伊勢國正

六位上葭原神預官社と見也其後を官社あまを神
津比古此佐くは小竹の樂り小のれど思牙を熟思牙也

下の佐を濁して佐邪と讀ばしげはを當社は佐陀村の
内あ也佐陀と佐邪を相通ふを榮螺を佐邪延と地名也
も佐陀延とも古代より唱へ來依不同じ

もと佐邪あるを。後よ佐陀と轉カクき流ハふや。今云、此考いと
 猿田毘古大神を、大歳神の兒よて、出雲風土記を依佐陀
 大神やがて猿田毘古神あるが上ふ出とる大土神と云
 ち、まよて猿田毘古神あり然れ、此佐、津比古命
 や、てて猿田毘古神あらむも知、佐、此事委く、命
 百五段の傳を、伊加利を稻川の義あり、年中行事、二月、伊
 見て知べし。賀利神事、まよ二月十四日、御田參向、次第、伊賀利奉仕、
 次、大土社參とあり。伊加利を作法と見ゆ、播殖稻川の態
 の義あらびやも、當社、大年神兒、まよ宇加乃御王神を祭
 田事よ決れり。あれど、穀ふと流事知べし。○此、三柱神亦云く、此神等此
 度會縣よ坐あとは、神名式と内宮儀式とふて明あり。縣
 と云ふ由を下よ出抄、第百三十四段
 の傳見る、佐、

カレソノハ ヤマドノカミノ ミコワカヤマクヒノカミ
 故其羽山戸神出子若山咋神。

ツギニワカトシノカミ ツギニイモワカサ ナメノカミ ツギニ
 次若年神次妹若沙那賣神次

ミヅ マギノカミ ツギニナツ ノメノカミ
 彌豆麻岐神次夏出賣神。亦名
 夏高

ツギニアキビメノカミ ツギニク クトシノカミ
 津日 次秋毘賣神次久久年神。

ツギニク クワカムロツナネノカミ
 次久久紀若室葛根神。

若山咋神。師云御伯父。大山咋神坐以故。おを若と云
お。大と若と對へて名義彼と同じ。○若年神。師云おれ
も御祖父。大年神。御伯父。御年神坐以故。お若と云。名
義彼神とち子同じ。○若沙那賣神。師云若を例の美稱お
。沙那を地名。下文。手力男神者坐佐那縣也。と云。
此を伊勢國多氣郡佐那神社二座。と式ある是お。或
ふ其二座の一座を此。若沙那賣神ありと。清和天皇紀。
云。名を依て此推當ふ。をのらざゆ。貞觀十六年七月。授伯耆國正六位上。天乃佐奈咩神。從五
位下。と云。依事。○彌豆麻岐神。名義下。師説を注せ
。神鳳抄。安西郡水卷神田一町と見也。安西を阿濃郡
を東西に分て

云。あり。はと源平盛衰記。越中。○夏高津日神。夏之賣
國。住人水卷。四郎安高と云あり。師云。高津日。庭高津
神。此も名義下。師説あり。日と同例あるべし。○秋毘
賣神。おれも名義下。師説あり。和名抄。筑前國。久
年神。師説。久は。舊事紀。久。二字を冬と作る。上
むと心得て改。おる。上れる久。能智神の久。や同。莖
おて。中。よ非あり。よて。草木。此立長。依貌を云。今俗語。物。此速。く長
を。久。く。延。ると云。お是れ。猶彼處。委。く。云。を考。合
以。三。段。の。傳。よ。注。せ。り。ち。て。此。は。稻。の。快。く。長。依。由。此
御名。お。れ。不。此。御名。お。就。て。思。存。む。若年神。と。下。五。神
此。御名。お。れ。不。此。連。ね。て。解。べ。き。考。あり。そ。は。ま。お。若年。は。稻

此苗の始於て生と依を云。但し此兄弟神ふ若と申はが殊多きと別意あるも。
沙那賣を沙之女ふて。沙を田植るおとれ也。其を委く上の如狭蠅此處に注せ依が如し。篤胤云此を第四十三彌段の傳ふ採て記せり。
豆麻岐を田ふ水をほりける也。夏を成立ふて。是も稻
種おとれ也。那理多都の理を省き多都を切む。秋を阿加理て。是も稻の
赤らむを云。阿加理の加理を伎と切る。赤らむを阿加流稻より云名あり。夏を暑あり。秋を飽ありと云説はよろし。あくふ夏と秋の御名阿
比て。春冬を云を無きを以て思ふよも。稻ふ依れるおと
を聞ゆ依おめ。ちて右六神。必しも各くふ其名此如き功
徳坐ふを非也。此神とち何きも。穀の事功有し故ふ。稻

此うす此事ども我以て。其御名ふ分充て。負せ奉也。物
お依るし。久く紀若室葛根神。師云。舊事紀ふ此久くを冬と作るハ非あ
るおと上久くは上お依と同く。紀を木あり。かくて是は。
室に造依材木の長く立延と依を云。若室を書紀ふ。宮を
美て日之少宮と云る少と同て。室をも美稱へる若と
云依お也。其を美豆垣の美豆を同意れ也。猶師の冠辭考
みだぐふ。委く見えぬ也。篤胤云冠辭考の説を美豆てふ
丸の條ふ。委く見えぬ也。語をまおを草木此若く美しく
栄也ふを云也。万の物は讚称て。美豆云くと云。万葉十
三子。槻木に水枝指とをみ世も若木を美豆木。若枝を
美豆枝。若く健とるある人を美く。豆はしあど云を思。若
遠江人を檀をも。今俗ふさう木と云木をも。其外も常
葉ある若木の青くと志と依を摠て美。葛根は都那泥と
豆木と云。若り古語此残れるものあり。葛根は都那泥と

訓ばし。葛を綱ツナあす。其由を。まは冠辭考いははたふの條ふ。

古は都奴ツナと云は。蘿ツタ這石イハあす。石綱イハツナ乃又變若ワカバ反とと絶依

を。石蘿イハツタのはひ別れてを。はと這返ハヒカる意の連ツグあすやあす。

今云。都多をまよ都良ツラとも通をし云り。都良を今世よを。蔓葛ツタと云是あり。篤胤云。此事は第二十段此傳ふ。委く注

せるを。けり今思ふ。物を結縛ツナぐ綱ツナふも。古を多く葛藤ツタカ

此類を用ひし故よ。都那ツナとは云れす。まよ木此綱ツナあす。然

れを綱ツナも。本は蘿ツタと云之同じらまは。葛ツタとを書るれす。け

て顯宗天皇紀ニホキ室壽御辭ムロホキ。築立ツキタテ稚室葛根ニホキ云くとあ依を。

此コと全同モト。今本よ。葛根を。かツラ。はと大殿祭詞ニホキ。此乃

敷坐シキマス大宮地底オホミヤトコロ津磐根ツツイハネ乃極美キハミ下津綱根ツツツナネ波府虫ハフムシ能禍ノケガヒ無久ムク

云く此本注ふ。古語番繩ツガヒ之類謂之綱根ツナと見え。まよ彼室ムロ

壽ホギふ取結繩ツケツナ葛者ツタナ此家長御壽コノイハキミ之堅也ツツナれぞも有は。凡てい

をいと上代ツの家造ヤツクリをいぢこ字もく。繩葛ツツツナを以て結固ツツツナ

免し物あす。下津綱根ツツツナと柱ツツの本ツツ此方ツツまよ床ツツ築ツツ此あよ

故宮室カレミヤムロを賀ホガふも。先右ツツ此如ツツ葛根ツツを云とす。天ツツよはも五

百ツツ於綱波布ツツ万代ツツ尔ツツ陞ツツ知ツツさむと五百ツツ於都奈ツツは多ツツ此哥ツツの

意ツツを天津神ツツの高天原ツツの大宮ツツ御坐ツツて大地ツツ及びツツ五星ツツ其

外ツツ宇宙ツツ有り有ツツる星辰ツツ万物ツツを主宰ツツ給ふ状ツツの差違ツツあき

を五百綱引ツツ延ツツさし貫ツツきて統治ツツ免給ふこと云へる。古

傳ツツと聞えたり。又案ツツよ。ちる綱ツツのゆるりも有べし。其を漢

語ツツも。經綸ツツ天下ツツあよ有依ツツ如く。天皇命ツツの天下ツツ治免給ふ

事ツツふ。云い。又移りて。御室家造ツツあよ。繩葛ツツ然ツツまよ

もて結固免ツツる状ツツも。美稱ツツへ云れるべし。然ツツまよ

故其大年神出兄。八島士奴美

神亦名清出繫名坂輕彥八島

手神亦云清出湯山主三名狹

湯山主三名狹

漏彥八島野神亦名謂八束水

臣津野命亦云淤美此神稱罔

豆奴神

引坐神由者八雲立出雲罔者

狹布出堆罔在哉初罔小所作

故將作縫詔而栲衾志良紀出

三埼罔出餘餘有耶見者罔出

餘有詔而童女曾鉏所取而大

魚出支太衝別而波多須須支

穂振別而三身出細打挂而霜

黑葛闇二耶二邇河船出毛二

曾二呂二邇圀二來二引來縫

圀者自去豆打絶而八穂米支

豆支出御埼也此而堅立出加

志者石見圀與出雲圀出堺在

名佐比賣山是也亦持引細者

藺出長濱是也亦北門佐伎出

圀圀出餘餘有耶見者圀出餘

有詔而童女胷鉏所取而大魚

出支太衝別而波多須須支穗

振別而三身出網打挂而霜黑

葛闇ニ耶ニ邇河船出毛ニ曾

曾呂ニ爾圀ニ來ニ引來縫圀

者自多久打絶而狹田出圀是

也亦北門良波出圀圀出餘餘

有耶見者圀出餘有詔而童女

胷鉏所取而大魚出支太衝別

而波多須須支穗振別而三身

ノツナウチカケテシモクルカヅラクルヤクルヤ
出細打挂而霜黑葛闇二耶二

ニカハブネノモソロモソロニクニ
邇河船出毛二曾二呂二爾圀

コクニコトヒキキテヌヘルクニハヨリタレミウチ
圀來二引來縫圀者自手波打

タチテクラミノクニコレナリマタコレノツ
絶而闇見圀是也亦高志出都

ツノミサキヲクニノアマリアマリアリヤミレバ
都出三埼圀出餘餘有耶見者

クニノアマリアリトノリタマヒテヲトメノムナスキトラレ
圀出餘有詔而童女宵鉏所取

テオホヲノキダツキワケテハタス
而大魚出支太衝別而波多須

スキホフリワケテミツミノツナウチカケ
須支穗振別而三身出細打挂

テシモクルカヅラクルヤクルヤニカハブネノ
而霜黑葛闇二耶二邇河船出

モソロモソロニクニコクニコトヒキ
毛二曾二呂二邇圀二來二引

キテヌヘルクニハ三ホノサキナリモ千ヒケルツナ

來縫圀者。三穗出埼也。持引細

ハヨミニジマコレナリカタメタテシカレハ

者。夜見島是也。堅立出加志者。

ハ、キノクニナルオホカミノタケコレナリイマハクニ

伯耆圀在。火神岳是也。今者圀

ヒキヲヘヌトノリタニヒテニハウノモリミツヱツキタテ

引訖詔而。於意宇杜。御杖衝立

テノリタニヒオヒトキカレソコヲイフオウノマタ

而。詔意惠矣。故其地云意宇。亦

コノカミノリタニヒヤクモタツノミコヲシユエニイフヤ

此神詔ハ雲立出語出故云ハ

クモタツイヅモトゾ

雲立出雲也。

兄は師云。御阿邇と訓はし。神代紀ハ兄弟はと垂仁天皇

紀ハ御子とち此次第を云處ハ第一をも阿邇と訓ハ

まハ仁賢天皇紀ハも異父兄弟と訓ハ此稱中昔の物

かり。今人の心ヲ云阿邇と云ハ俗言のハ思ハ先述ど

言ハ止豆乃古乃加美とあまど古乃加美まハ母兄波良

子ハ限ハ稱ハあり。魁帥ハあまも其中ハ長を云ハ官司ハ

も長官を加美と云ハ然るを必しも第一ハ限らハび

ろく弟ハ對へて云ハ兄ハ字訓ハ後ハ轉ハれる後ハの言ハ

る。此のちまば應神紀清寧紀あどふ長子を訓るはとく
當れり。此の先お三柱女神坐せむ長子よは非ざれば叶
も此のまお伊呂勢伊呂泥あどは同母のを云稱あまむ是
も此のまおかあハバ然れどあ勢と云ぞひろく兄字ふ
とく當れど此の然訓む。八束水臣津野命名義を内
も語調をろしうらばあ。山眞龍云八束水を彌束身津ふて八束劔の身を云劔の
實を美とも比やも云古語あ。王銚此道も銚此
身とうけと。あを
劔ふと依御名ふて八束此身の大身主と云言と思はる。
と云。大身を意美とばり也も云古事記よ一言主大
神の御躰を現をし給へる処小宇都志意美とあ
美と云るあ。劔ふ由あるあとは下よ見也。第七十九
段の傳見
し。○因引坐神此神をかく稱せ依こぞ出雲風土記ふ數
處小見えあ。即此段の御態を稱了て申せ。大因主神

を天下造坐大神と稱はぐ如し。○八雲立出雲因あを前
小須佐之男大神の八雲立出雲云くと御詠坐る歌詞
哉。此神は始れて因號と志て詔了依あ。委く此段の
未小注べし。
○狭布之堆因在哉。狭布ハ佐奴能堆因を佐波伎玖邇在
は那流と訓はし。堆字を稚ま推あど小誤れる本あり。
其字ども小依て云る舊説をかじろし。
けり。狭布や字は如く狭き布と云依ふて因のいまだ
片成ふて狭きを狭布小譬へて堆因を云よ重祢と依あ
也。眞龍解よ。宣長云。狭布を織中の狭きを云。陸奥は々ふ
の細布あどの類ありとあり。信友云。六帖よ。布は題ふ
て。陸奥はけふぬさぬのれ布どせむみまどむ祢あをぬ
恋もあるうぬま袖中抄十九よいし。ふみやふのせ
ばぬ此をぬけく。あひ見ても猶ありぬけさうぬと有
也。此せばぬけく。本。狭布と書るを志の読あして。假字

小書傳、とるう。はとせばぬのとも、さぬのとも云べし。其はとまれ、佐奴乃と訓むりと勝る。三代格、大同五年二月、陸奥、因、浮浪人、推、土人、輸、狭、堆、布、事云く、依、請、と云ことも見ゆ。堆を佐波伎と訓る由を、字書小、堆、小、壤也を注して、狭少き由を依よ、神代紀の古本よ、小字を佐波伎と訓る處く、何に、狭、此古言と通ぬれ。密、亦、也。○初、因、小、所作。小を佐波久と訓、比、佐久と訓むも、非、小を有ら、林と佐波久と訓う。おは師云、伊邪那岐伊邪那と上より語重ありて、調宜し。美二柱、大神の、初、於て生成給へる時、小く作、給へ、と、何に、當時、お、此出雲、因、を、北方足は、盛、志、て、狭、布の如く、狭く、細き、因、亦、也、む。○將、作、縫、ハ、師云、足、は、る、處を、足、して、縫、合、せ、て、廣く作、成、むと、亦、也。○考、衾、志、良、紀、之、三、崎、考

衾ハ、志、良、小、係、と、依、發、語、亦、也。加、茂、翁、説、小、仲、哀、天、皇、紀、小、考、衾、新、羅、因、万、葉、十、四、小、多、久、夫、須、麻、之、良、夜、麻、可、是、能、云、云。亦、亦、十、五、卷、よ、も、お、は、考、布、ハ、衾、の、白、と、連、け、と、也。考、を、木、綿、小、て、白、き、物、亦、ま、む、也。今、云、考、や、ぐ、て、由、布、亦、る、お、と、は、既、よ、第、四、十、八、段、の、傳、よ、注、せ、り。は、と、古、事、記、よ、多、久、豆、怒、能、斯、路、伎、多、陀、牟、伎、云、く、万、葉、三、よ、考、角、乃、新、羅、因、從、云、く。亦、亦、二、十、卷、よ、多、久、頭、怒、能、之、良、比、氣、云、く、と、も、此、を、綱、亦、依、茂、音、便、小、都、怒、と、云、也、ま、と、万、葉、十、一、よ、考、領、巾、乃、白、濱、浪、乃、云、く、お、れ、ら、も、同、じ、連、け、亦、也、と、有、也。亦、亦、委、辭、考、字、見、て、知、べ、し。考、衾、と、云、物、の、お、を、は、下、小、出、於、第、九、十、九、段、は、多、志、良、紀、之、三、崎、也。良、字、を、羅、と、作、る、本、も、多、く、也、同、志、亦、と、何、り、崎、を、椅、也、亦、依、本、を、誤、何、り、

師云。新羅國の地は、東南方は、海牙突出多は、御崎あり。○
國之餘餘有耶云くは、彼御崎を國餘の餘にて廣き地は
にや。如何と尋ね見まじ。餘れる地ありとあり。元本ども
お餘字二
お重りて在を行せとて削はる非あり下ある同文の処
処にた餘字一れり古言を知らぬ人此早く削れにと
見ゆれば此一二ありあり。○童女曾鉏所取而鉏を新撰
ゆて下おもに補へに。
字鏡よ。須支とあり。まよ鋤鐮鍬おど
をも須支と訓に和名抄農耕具よ。釋
名云。鋤去穢助苗也。和名
須岐鍬挿地起土也。和名
同上と有て。鉏字
をれし。師説よ。鉏の形は美女の胸に如く廣く直く平あ
はれ。童女曾鉏と云ふは、はれし。万葉九少女の貌乃美を稱
て。胸別之廣吾妹をあるも胸は直く平あるを云ゆと聞

也。まよにまよ曾字を齋と作る本もはれよ就て。加茂翁
此文意考ふ。此文を擧とあり。齋鉏と訓て。大嘗祭は齋殿
作らゆ。時柱立る地は、まよ童女よ齋鉏もて掘せらゆ
るよ同く。此地を掘別は始終の事を云と解き。信友が説
よも。儀式大嘗宮條よ。大嘗宮は柱立る前よ大祓ありて。
始作内院雜殿。造酒童女執齋鉏掘稻實殿四角柱穴物部
次之役夫次之。まよ同條よ云く等為採内院料枝向ト食
山即祭山神云く祭畢造酒童女先執齋斧
伐樹工匠次之。まよ有よ思ひ合はるよ。國の餘を突分け屠め
之役夫次之。まよ取むと志て。まよ童女よ齋鉏令取て。掘始終させ。其齋鉏
を。臣津野命の所取て。衡別給へはあり。上よ引よる儀式
文よ。造酒童女執

斎鉏掘云々穴物部次之役夫次之とある次第を熟く思ひ合はせし此文を一已より見ては臣津奴命一柱して物し給する事と聞ゆまども然しハ非じかく事始し多此因引の事を司り給ひ多くの神あちを集りて事訖し矣御霊配りて成かく童女此事始まゆ神隨定まれ依固め給へ依あす加く童女此事始まゆ神隨定まれ依最く古礼儀式依を大嘗會の儀式も受傳子爲させ給するよていと尊し。色葉字類抄も童女イムコ大嘗會の儀々まど此の文もあす遠登賣を訓むぞ穂ぬるべき也云す此説も通也見む人撰びて採法し。○大魚之支太衝別而師云大魚は鮪の類此大か依魚を云支太は鯰ある法し阿を畧死登を通は志て支太とも云ふ也。鯰も常ふ支太濁り登清て云云々む太を古書ふ濁音の假字も用と依字あり衝別を漁人小聞くよ大魚を捕

ふを其喉を祢らひて衝て捕と云す也。古歌ふ鮪扱くとある是あす。今云清寧天皇卷の哥も意本袁余志斯毘都久阿麻余云々とあり大魚を鮪扱く海人云と云す。依あり。はまむ衝と云む序ふ大魚は鯰とは云す依ある法し。鯰も口の傍あれむいけく違するが如くあまど喉も口比奥れまバ外とめ衝とあろをむ然も云べき。はて衝別やは彼因の餘れ依地を鉏を衝入まて。分取を云ふ。今云信友も支太衝別と云大魚を段くも突れ段くも分る状を譬す也。○波多須く支穂振別而波多めと云へりあす考ふべし。須く支は花薄ふて穂と云む發語あゆが波那を波多也も云依れ也。されど其を言は趣ふ依ことふあそ有ま常も云依れ也。よ打任せて花を波多と云あせを無きあり其を神功皇后紀ふ幡萩穂出吾也云く万葉八小波奈須

爲寸穗出秋乃云々。十四ふ波多須酒伎穗爾氏之伎美云
 云。おど有もて知る儘し。おち万葉よ皮爲酢寸旗須爲寸
 巴然れぞ新撰万葉よ二所まで花薄せうき和名抄よも
 新撰万葉を引て薄波奈須く木とあり古今集ふはあま
 虫き我こそ下よ思ひしう穂よ出て人よ結むれよゆ
 ぬども有ゆ久老が漫録ふも早く波太は波奈と通言ふ
 て万葉よ皮をく死と何るを古今集よはぬを死と
 云ひ垂仁紀ふ見よ赤躰伴とある劔を舊事紀ふ赤花
 と何にけりきおむるもあきつ花ありと云りき冠辞考は
 とやぐ死の條よ幡旗あぞ書と依らむ秋野の中よ
 薄ハ物より高く顕れて葉も長くて中あるあま幡虫
 虫きと云おらむ其由を魚を鱸乃廣物鱸乃狹物と云ひ
 和名抄よ鱸波太俗云比礼とありかく波太とも比礼と
 も云む即旗領中おどと正魚がさまおも云移しおせ見
 ぬまバ此や死も旗の靡き領中を振おどの様ありと
 て然を云しあるべしまよ皮字を書とるよ依れむはと
 此とを濁ゆて膚比義としさて穂字皮ふ含みもて漸ふ
 開出るあまむ波太須く伎とは云らむとも覚ぬと云れ

ぬるハ信 穂振別た師云屠分お正獸の肉おど戎切分た
 を屠るぞ云と同じ言ふて崇神天皇卷ふ斬波布理其軍
 士と何ゆも同じ。眞竜云斬裂を波布流と云ふホヤハと
 裂也と彼餘あゆ地を鉏もて切分るを云ぬ也。今云信友
 云り。波多須く支た鱸鮒あふべし古事記よ口大尾翼鮒とあ
 るゆも合せ思ふべし其を鱸鮒を屠る如く彼段突分と
 る固の餘を分取さゆを譬とるよ段突分も屠分も大
 うあ同じ状此事おれども支太衝別た彼固お属とる土
 地を突分る意屠分た其を分取 ○三身之綱打挂而師説
 意ありと云りおち考べし。眞竜は舟字の誤と志てぬ万
 身字は寫誤ぬゆはし。然改死とまぜいかどと覚ぬ万
 葉四よ三相二搓流絲とあゆた二筋をと正合せあゆら
 ずふ今一筋をと正合せあるふて剛き糸おゆ。万と孝徳

天皇紀ふ。三絞之綱と何儀も然あり。けまむ搓の意ふ借
て。自と書る残誤れ儀う。まと會此誤ふて。三合よても有
儀しを有れど。三身は三績の宇を畧る儀うて。麻葉あど
るを宇年や云是あり。姓此麻績を遠美と云ふて知儀し。
麻績をまと麻統とも書る。統合儀る義あり。字も思へど。
本草此皮ふまき何ふまき。三相ふ絞合せある綱を云布
あ。打挂た。か此屠分と儀地牙打挂て。海上を引寄儀れ
ゆ。○霜黒葛は。師を斯母都豆羅。餘書どもふ黒葛字あり
ふ。都豆羅と訓と儀例を除去。此を斯母久流加都羅と字
ふ。隨ひて訓儀し。黒をクルと訓は和名抄。大和國城下、
抄。久須加豆良と有て。今も其ふ用。儀字あり。是あり。葛を同
古書よむ。あ儀て加豆羅と云ふ。此字を書來れ也。下此闇

闇耶いふ重祓て黒葛操ると係と儀序語あり。其は神樂
此早歌よ。美也乃古川く良。久く禮く古川く良と有字
も思合ま儀し。神樂注秘抄。みづらを葛あり。くれくれ
霜としも言儀る。師も且く言れま儀如く。此物霜置て後
ふ採れぬ強き故ふ。古も其頃ふや採用るむ。故かく冠る
ぬらむ。さて信友を師の斯母都豆羅と訓まるとふ。從ひ
か。抄らとも黒葛。山里人尋合儀るよ。黒。抄らとも黒
藤地よ就て蔓延る。葉落ち霜枯てを。藤。黒く成あり。其
を。手操とりて。物を束。垣あど結固む。る料とし。儀と。筐
もの。葛。箆器をも造儀あり。此葛もて編て。造まる。筐を。や
グて。ツ。バ。ラと云へる。後よむ。竹よまれ。柳よまれ。編て
造れる。筐を。あ儀て。ツ。バ。ラとさ。子。云。免。り。け。て。黒。葛。字。色
葉字類抄よ。本朝式を引て。ツ。バ。ラ。や。訓。み。ま。と。大。神。宮。後
式。延。喜。式。あ。ど。の。古。訓。よ。も。然。あり。蔓。草。の。あ。る。が。中。よ。も。

出羽、秋田あどふて、俗言ふのろしと云、詞を用ふべき事
ふ毛く曾く呂くと云、其を譬へて急ぐべき道を急ぐに
綴り行をあげよ毛く曾く呂く去るぞれと云類あり、荷
田、在満が説ふ毛曾呂の毛ハ、発語ありを云へるを委う
ら、ちて河船之は序ふて、海ゆく船ふ比ぶま、川ゆく船
を徐ふゆく意よて連ぬはあるべし。儲上、文と此をば、因
引坐る海路の間、此状れ也。と有也。今云、信友を河船之を
あり、運歩集よ、小流水多ソロ、と訓も思ひ通ふべ
し、但し凡ての趣を思ふよ、此を河船に綱打うけて、流れ
を曳上りよ、譬へたり、上の間、取れと、此毛く曾く呂
呂の二句、心をと、絶て、因引き、此状を察ふ、常言ある
真竜も毛く曾く呂くは、寛く、そろ、あど云、常言ある
べし、三河、因比舟哥ふ、船を行く、於く曾呂を、諸ふ、似
也、と云り、共ふ、然も、○因く、來く、引來は、師説よ、此も亦い
有、強く聞えたり、○因く、來く、引來は、師説よ、此も亦い
例の強て云は、來、字を寄の誤りて、重なるよ、ちて下、此
此文、小做ひて、因く、寄くと誤りて、重なるよ、ちて下、此

文と、因紛、寄を來ふ誤、とるあ、因、寄とを、彼、餘れ
依地を、寄來るを云、あり、一本、由、良、く、せ、作、る、は、誤、あ
ゆ、と、有、り、真、竜、は、由、く、良、く、と、有、を、用、ひ、て、諸、本、小、因、く、來
來、を、何、ま、ど、今、を、東、方、呂、の、本、に、隨、ふ、万、葉、に、大、舟、乃、往、良
往、良、天、雲、之、往、莫、往、莫、あ、ど、有、り、同、く、舟、の、水、小、ゆ、は、く、状
あり、と、言、ゆ、但、し、文、意、考、よ、も、早、く、ち、解、れ、と、り、然、ま、ど、
信、友、説、ふ、因、く、來、く、と、訓、は、し、去、は、彼、衝、分、と、依、因、の、土、牙、
綱、ら、ち、挂、て、操、く、取、く、ふ、毛、く、曾、く、呂、く、を、引、お、く、因、來、と
因、來、と、と、力、聲、を、加、け、て、引、來、坐、る、由、の、古、傳、あ、る、は、し、せ
二、云、依、よ、依、法、し、○、縫、因、を、は、引、來、給、牙、依、新、羅、地、を、出、雲、因
牙、縫、合、せ、と、る、地、を、云、○、自、去、豆、打、絶、而、去、豆、は、師、説、の、如
く、地、名、あ、り、楯、縫、郡、小、許、豆、社、ま、と、同、社、と、有、て、並、在、神、祇
官、と、あり、神、名、式、に、許、豆、神、社、と、て、二、社、を、奉、ら、れ、と、る、を
是、あり、風、土、記、抄、に、許、豆、二、社、楯、縫、郷、大、宮、大、神、

与礫大神二社也と見也。今も古豆村と云ふ在と。神名式考證に見也。此外ふも、許豆社と云を三社舉て、竝不在神祇官と云抄、式外、許豆之社、在古津浦和多御崎、昔者。三社、今見一社也と云り。ちて許豆嶋生紫菜。許豆濱廣一百步出雲、与楯。あぞ見也抄、許豆濱、俗云、古津浦とい予り。此の去豆は、即ち此地を云ゆ。○八穂米支豆支之御崎神賀詞、八百丹杵築宮と云詞ありて、加茂翁説の如く、八百丹と云、多くの土を云ひ、其を杵して築と云うけ、多の詞ある故、此八穂米を師説、米字を誤れ、成べし、八百土とて、杵築の枕詞ありと有。信友説、諸本み形米と云、依て按ふる。八穂米と云は、訓て、彌穂米也。米を杵築と云ふ係は、枕詞あるべし和名抄、米穀、実也、与祿とあり、亦も雅とる古言あり。と云す。支豆支

之御崎也。師云、分ては、今世、小日之御崎と云處、亦まども。此は楯縫郡の堺まで、此地を廣く云ふ也。然れば、杵築此東方まで、渡れ、依山をも、御崎山と云す今云、此地を由、第百二十、支豆支と云。○堅立之加志カクダシ。師説、加志は、和名抄、舟具也。唐韻云、戕河、所以繫舟也。漢語抄云、加之と云る物、舟万葉の歌にも見えし也前漢書、地理志、戎河と云、詳河と云、書、注、係舟、杵也とあり。かくて、此云、依え、縫合せ、依、固字、は、離れ行ざらむ、爲ふ。繫、龍、堅、免、給、予、也、戕河ありと云ひ。眞龍、解、舟、加志は、舟を繫ぐ、杵を云ふ。万葉、許具、布、禰、乃、可、之、布、流、保、刀、爾、と云み。今も、遠江、因、引、佐、江、の、海、人、は、杵、立、る、を、加、志、布、流、と

云ふ。文徳天皇紀仁壽三年六月此處。採集破船杙木造一舟とあまは。大木を用ふる処と見え。文意考ふも和名抄を引て此
を引とせとの地名。加志杭字多て。繫とめとの由ありと有也。今按ふ。戕河まを楫あどを造る。櫓木木と良は無き。今も彼木を以て造る。然まを櫃てふ名を。もと戕河を造れる故。負る名。非ざあり。其を弓木作る。木を眞弓木と云ひ。矢よ作は。けて信友説了。肥前風木を柳と云をも思ひ合はる。し。
土記周賀郷の下よ。昔息長足姫尊。欲征伐新羅。行幸之時。御船繫此郷。東北之海。艦舳之戕河化而爲磯。高二十餘丈。相去十餘町。嵯峨草木不生とあり。いと後の事あら。は。て今も浮田流田あど云て。沼あぞ此如き。水上。泥の堅ま。浮とあり。田所を去て。稻を殖る所あり。霖降りて水

溢る時。其泥の浮上。て。あらぬ處。牙流き出る事あり。故その稻莖。れと。藤おら。藁あど。此繩を結お。て。傍の植木。ま。杭あど。多も打立て。繫ぎ止む。事あり。此をいと。少死事。れ。ら。此の。引。此。状。似。する。理。此。今。現。ある。事を。悟。ら。ぬ。人。此。爲。よ。い。は。く。の。驚。う。し。お。く。よ。あ。む。神。と。ち。此。国。造。り。坐。る。依。状。お。此。国。引。の。古。傳。ふ。て。大。凡。お。ま。は。り。め。奉。る。は。き。れ。也。○佐比賣山は本よ。飯石郡ふ。佐比賣山。郡家。正西五十一里。一百四十步。石見。与。出。と。見。也。雲。二。国。塚。
鈔。よ。波。多。郷。角。井。村。与。石。見。国。阿。濃。郡。四。加。久。村。之。塚。也。と。あり。 眞龍解ふ。此山。山陰道。此高山。了。て。夏。日。も。雪。を。頂。く。石。見。国。阿。濃。郡。よ。屬。て。俗。ふ。

石見富士と云。塚を佐比賣と云は常あり。二箇の塚ある
故ふ名よ負ふ。と出雲臣俊信と云。今訛して三瓶山と
も云ふ。飯石郡也。此山の麓を塚とひきりぬ。神名式ふ。石
見、因安濃郡ふ。佐比賣山神社あり。於美豆奴命を祭れる
ふ也。まと同因美濃郡よも。式う佐比賣山神社 ○持引綱
あるを安濃郡あるを移せるあゆべし。
とはかの因を挽來坐依綱あり。○藺之長濱は神門郡文
了。水海與大海之間有山。長九二里一百卅四步廣。三里。此
者意美豆努命之因引坐時之綱矣。今俗人號云藺松山地
之形體壤石竝無也。白沙耳積上。即松林茂繁。四風吹時沙
飛流掩埋松林。半埋半遺。恐遂被埋。已と見也。眞龍云此
濱を伊那

佐の小濱を傳ひ。神門の海辺を。石見の塚まで。東西小引
延よる沙山ありと云ひ。大社記う。今、人在高濱といふと
云。了。師説よ。はと出雲郡。文ふ藺長。三里一百步。廣一
里二百步。松繁多矣。即自神門。水海通大海。江長。二里。廣一
百二十步。此則出雲與神門二郡。塚也とある也。藺長濱長
云くと有るむ。長字とに紛ひて。長濱二字の脱と依ふ
て。彼藺松山と同所あるを。山は神門郡ふ屬き。濱を出雲
郡ふ屬るふぞ有む。と云れしを實然ことあり。○北門佐
伎之因。北門とは。師云出雲因の北面。北海を云れらるる。
眞龍云。筑前風土記よ。岫門。万葉十四ふ。思麻度。仲哀天皇
紀八年の処ふ。魚塩地を限りて。東門西門ありと書と依例
もあ
り。佐伎之因。此事也。信友が説あり。北門。良伎之因の下

小注^レ。①自多久打絶而多久は嶋根郡小多久社あり。但し不在、神祇官社の中ふ入らり。鈔よ。はと多久川源出多久郷講武谷神多久森社也とあり。郡家西北廿四里小倉山西流入秋鹿郡佐太水海ともあり。眞竜云此川を秋鹿郡よてて佐田川と云。鈔よ。經佐田船見橋以入于水海といふ。今の橋場を云あり。○狭田之圍也。秋鹿郡小佐太川源二。東水、源島根郡所謂多久川是也。西水、源出秋鹿郡。二水合南流入佐太水海。即水海周七里水海通入海。湖長一百五十步。廣一十歩と見也。鈔よ。東水、源出島根郡源出秋鹿郡今中田村中田古之渡村也。水海今云濱佐田水海也。至今毎年浚之。南注諸海とあり。眞竜云水海南北を流る。を此所を南流を記す。北流を彫鑿壁の流惠曇濱よ入る。佐太御子社もあり。此地を云ふ。佐太御子社此こととあり。第②北門良伎之圍也。諸本

小良波とある。小就て師説よ。良理流礼呂を言の頭小おける例をあ。死事あま。良字を誤る。依り。但し出雲圍の大海北北方も。隱岐圍の外小ハ。圍も島も有こと無き。む。上あ。依志良紀の御崎。唯ふる。若く。上北。佐伎之圍也。此良波之圍也。北方あ。依異圍の名小も。有む。あ。布能考ふべし。と云れ。文意考ふ。此をも。佐伎圍とありて。頭書小一本よ。良伎とあ。依由を記して。其説小。此。次よ。高志。都。三崎と云を以て。北門北。此海門の方を志。越圍の崎をせむ。然ら。若狭圍三方郡小。式。佐伎神社と。閻見神社ある。此よ。由あり。此の文を。誤字いと多々。れ。左。右。小。心得。の。と。け。れ。と。試。小。云。此。み。と。有。り。今。を。其。良。伎。と。あり。本。よ。と。正。於。そ。は。信。友。説。よ。良。は。意。の。誤。り。て。意。伎。圍。あり。其。は。草。此。手。小。意。を。之。良。を。云。や。り。よ。書。ふ。いと。肖。多。依。り。依。て。寫。し。人。の。誤。り。て。意。伎。良。と。書。と。依。本。此。早。と。め。世。よ。播。正。傳。を。ま。る。あり。意。字。を。用。と。る。あ。や。た。圍。造。本。紀。小。意。伎。圍。と。か。き。伎。字。は。古。抑。出。雲。圍。此。事。記。よ。隱。伎。と。書。正。矣。れ。は。ち。隱。岐。圍。あり。

大海の北方ふは、隱岐、因の外ふを、因も嶋も有る事ふ知
ふ。北門云くせ云るを、隱岐、因おほくと決く思を、ゆくふ
就て、因圖を考ふゆふ。此、因出雲、因の大海北門ふ當
多。四嶋ふ分と、ゆぐ中よ。出雲ふ直よ向する一、此嶋あり。
いま向之嶋と云。知夫郡其後よ。二、此嶋西東ふ雙びと也。
西の方おゆを、今知夫嶋と云ひ。此島を知夫郡と云東此
方れる哉。今天之嶋を云ふ。海部郡と云此、三の嶋
を統て、俗ふ嶋前と云す也。隱岐之三子島と云其
嶋前、此奥ある。大外、此嶋、因を、隱岐の本地也。隱地郡周吉郡と云
和名抄よ、因府在、周吉郡此を俗ふ嶋後と云す也。諸そ、此嶋前、此嶋の

前、此義ふて、是謂也、ゆ佐、因おほは、さ。三島を、結、さて、今、向、之、島、と
云るも、本、を、佐、之、島、ある、向、字、を、を、普、て、ム、カ、フ、を、読
おま、と、ゆ、ゆ、く、お、唱、変、と、ゆ、も、や、有、む、此、因、の、郡、名、海、部
を、ア、一、へ、ある、を、後、よ、カ、イ、フ、と、字、音、よ、唱、へ、て、字、を、海、夫
と、変、する、字、も、思、合、出、は、し、加、く、例、諸、因、ふ、多、し、は、て、此、
向、の、島、此、出、雲、ふ、向、ひ、する、海、辺、ふ、崎、野、と、云、ふ、所、も、あ、り、
ま、と、天、之、島、よ、崎、といふ、所、も、あり、是、も、思、ひ、合、は、は、し、
嶋、後、を、嶋、の、後、了、て、奥、此、意、お、ま、謂、也、ゆ、意、佐、因、ある、は、し、
意、久、と、佐、伎、と、ハ、相、對、する、言、よ、て、山、の、さ、た、山、お、く、お
ぎ、云、如、く、此、方、を、主、と、あ、て、彼、方、此、事、を、云、う、本、意、と、思、を
る、ま、ど、は、と、轉、り、て、は、此、方、を、り、云、を、彼、方、お、受、て、か、く、多
い、ふ、名、を、も、せ、也、その、斥、け、所、此、名、は、達、ふ、事、あ、し、か、く、多
上、代、出、雲、因、邊、を、ゆ、は、北、門、の、前、此、因、今、の、島、前は、と、奥、の
因、今、の、島、後と、云、す、ゆ、を、普、て、を、海、此、瀛、抄、因、お、ま、は、四、嶋、を、管
て、も、意、佐、因、を、云、ゆ、お、也。日本紀纂疏よ、も、隱岐者、奥之、義、也、と、見、え、と、也、万葉十六の

哥小奥^{オホ}因^ヰ領^リ君^ノ之^ガとあるも海を隔^テる因^ノの事と聞^ケ也。檜垣の姫^ノが家集^ルふ肥後^ノ己^ノりの事をおく此^ノ因^ヲせ云^フり。志^ス云^フる證^{アリ}あり。○手波^ハは諸本^ニ小宇波^セ何^レ也。師^云宇^字字^を一本^ニ小手^セ作^ルるふ就^テ考^フふは手^ニ染^ルるはきり。嶋根^郡は手^ニ染^ル郷^{あり}也。凡^ソ多^ク此^ノ趣^ヲをもて考^フふは此^ニか加^ハれらば。上文^ノの多久^とめ東^ニ下文^ノの三穗^之崎^と也。西^ニ在^ルはき處^也。あまむ。手^ニ染^ルふて。地理^とく叶^フ也。今云手染郷の事。第九十六段。出其下。注ふ。○闇見^ノ因^ヲ也。師^云嶋根^郡久良^彌社^也。今云此社は在^ルゆ。神名式^ニ久良^彌神社^と何^レ也。考證^ハ小倉^村也。云^フ在^ルと云^フへまど。風土^記抄^ニ在^ル餘^戸里^本庄^村加^波阿^氣谷^也云^フり。何^レはと。掠^見社^見也。今云此社は不在。神祇官^と記^セり。鈔^ニ鎮^座新^庄村^{久良美谷山頂}也。云^フり。此處^ハ多久^川と也。手^ニ染^ルまで此^ノ地^を廣

く云^フる也。信友^云此^郡も因^ノの北^ニ有^テ。即^チ風土^記に

此郡の千酌濱。此下。度隱岐。因津。とも見

え。事^葉叶^ヒ多^ク聞^ケ也。

○高志^之都^之三^崎也。師^説ふ。高志^ハ越^前因^也

あ^レ也。都^之三^崎を詳^カらば。

和名抄。能登。因羽。昨。郡。都知。郷。越後。因頸。城。郡。小

宇^郷神^名帳^ニ越^前因^敦賀^郡ま^と坂^井郡^御前^神社^也。あ^と在^ル。此^ノ中^ニも有^ルむ。あ^ちと尋^ヒぬ。

何^レ也。信友^云按^フ。越^前此^ノ地^名あり。平家^{物語}に。越^前小^抄

抄^と云^フ。地^名見^えば。此^ノ因^ノの産^物。九十^布と云^フ。有^ル

ま^と。因^ノの古^き書^ニ見^える。其^ノ抄^てる。地^今詳^カらば

と。熟^按ふ。今^敦賀^郡敦^賀津^ノ北^方。泉^村小^屬也。天^筒山

と云^フ。有^ル。其^ノ東^方。海^へ出^ル。山^岬を金^ノ崎^と

い^ふ。大^平記^ニ手^筒金^ノ崎^と並^シて記^セる。是^ニ古^抄あり。摠^て天^筒山^とて。其^ノ山^岬金^ノ崎^{あり}。

や云はむ。必お此邊ノの大名ふて。金ヶ崎の海邊ハ此ニ多ク也。
都ク此ニ三崎あるハ也。委ク云ハむハ事長けレばハ此ニ尽スさレば。 ちて其金ヶ崎
此北の山下は入海ふて。東方ハ此海門とシ也。大海ハ續キ多ク
也。其海門ハ此大海を、西南の方ニ出ルはル也。越前、若狹、丹後、但
馬、因幡、伯耆、出雲ハ此ニ固ク。北方ニ向ヒて列スられレ也。彼海門
雲までの海上を直チ小計固引の次序も、便有て聞カれ
らむ。大凡、六十里餘有べし。怒我阿羅斯等ハ越、固、筭、飯、浦ニ泊ル也。
む。必、此處ハ依ル也。穴門ハ島ニ浦ニ小留連ヒ北海ニ廻リて、出雲、固、金、
を經テ、都ニ到ルる由見えルる字も思ヒ合ヒべし。
崎の入海ハ此西南、或ハはち敦賀、津ニあリ也。此ハ古クも聞カえ
る依處ハあり。都ク此御崎の固、餘を屠リ取リして、程ハ此ニ

ろし此湊を造シ給テ、依ルる也。○三穗之崎ハ嶋根郡
ふ。三保、郷見えて。東ニ終ル也。美保、濱廣ハ一百六十步。西ニ有ル神社
北ニ有ル百美保、崎ハ周壁、時トあり。眞竜、解キ、周壁、時、罪定、岳ハ也。
姓之家、美保、崎ハ罪定、岳トあり。周壁、時、罪定、岳ハ此、崎ノ
景状を云ハありと云ハり。八千、矛、神ハ此高志、固ノ沼河、比賣ハ也。
通ヒ坐シして、生シ給テ、依ルる御子、三穗、須ク美、命ハ也。此處ニ
住給へ依ルる由有る事ハ也。亦ハ第百三段ノ傳ハ注スを見ル。 ちて師説ス。
上の例ども依ラむ。此上ニも、自ラ某處、打絶シ而シと云ハと
此有ルべき也。此ハ此み其詞ハ也。此三穗、崎ハ東の限ハ也。
海あるハ故ハ也。此下ニ是也といふ二字も有ルべき也。無
きは此ニを畧シて、合セて下ニ云ハる也。○夜見、嶋ハ也。嶋

根郡蜈蚣嶋の所ふ。即自此嶋達伯耆国郡内夜見嶋と何
依是あり。真竜云。鈔よ伯耆国弓濱也と云り。ユミヤミヨ
三同言あり。此濱より蜈蚣島子渡るを。今俗馬
の渡といふ。○火神岳を師説ふ。此風土記鈔ふ。伯耆国会見郡

大山是也と云ふ。然も有げし。其よ就て思ふ。大山は神
名式ふ。大神山神社と何まむ。火字を大を誤まるふを非
ざゆりと有也。諸本に火字ある中。堤朝風の得と依
本のみ大と作て。異本を何まむと按多る
も火字あるを一本もあし。然れど他人の持多ゆを。何ま
も火字ぬまバ姑く字は火ふ随ひて。訓を大に從ひ扱
大神山神社を。国史ふ。承和四年二月戊戌。伯耆国無位大
山神奉授。從五位下。齊衡三年八月乙亥。伯耆国大山神加
正五位下。貞觀九年四月八日。伯耆国正五位下大山神正

五位上。おど見也。

但し祭神を。決然て大國主神あらむと
思たる。其由ハ第九十五段の傳お注を

見ば 真龍云。此山は三保と南北に相對ひ。前文に佐比賣
山を。杵築の崎と日横ふ相對ひて。鎮とも云べき大山お
也。杵築に崎を。因に西北よて新羅ふ對ひ。三保崎を東お
けし出て高志ふ對ふ。斯て因成て。其引給子依綱は夜見
嶋。其杵を。火神岳と成し傳お也。○是也。は。師云。上の三穗
之埼。夜見嶋をも合せて。一に云るれゆ。○意宇杜を本ふ。
所謂意宇杜者。郡家東北邊田中在。孰是也。圍八步許。其上
有木以茂と何也。真龍云。孰を。東方呂云。平地有堆者。孰と
云牙む。小山を訓べし。と云れしハ能叶牙也。但し其杜を

詳あらば。意宇川、辺の古黒田と云し所は、意宇六社中の社とて一社あり。此あるべし。在塾と云へる處を、あくせ師云。風土記に、此神は御事處くふ出で、彼国に、さし進し。甚く功ありし神と聞えと云。然るを其御社の見えぬを、如何かあはれ。○意惠を師云。事ふ勞死て苦きを休息ふ時の聲あり。はて惠は宇延の約と云音ふて。上は宇を帶る故ふ。おはちうら後ふ。意宇とあまる成はし。功を成畢て、意於惠衣と健ひ給へはあり。軍士は戦ふ勝て、此雄健して、挙る色は等くるはし。戦の場は、此色を揚るを、豫は進り健びて、開はて此臣津野命に、引來て縫扱くりかくるおと云り。作、坐は坐はての地を、嶋根、秋鹿、楯縫、出雲の四郡ふ。東と云。西は連あまる地ふして、其を西と云次くは物し給

予はあは。此四郡のうち、出雲郡を除きて三郡を、南方意宇郡との中間に、細く長に入海あり。出雲郡は、意宇神門二郡に續きあは。此は眞龍が考へあはを。神代ふを。此入海、西北大海に通りて、出雲郡も、北方半は、かの三郡を同じく、入海を隔て。意宇郡、神門郡とを離れてぞ有らむ。と云る。今この圈引は、文を思ふふも、誠ふ然有らむ。年とぞ所思は。さて此文を見、この事どもを、神代ふを思ひの外、ある奇しき異き事どもは、有て、此土ハ成竟とあるまむ古の傳説を、いけりも疑ふべき。是非、悉く案此事あり、と言れ、眞龍が解ふは、丹後風土記に、天橋立は故事、あはの事、第三十一段、はと天武

天皇紀十二年十月壬辰十四日あり此下トコふ。大地震云く。土佐

田苑五十餘万頃。没シテ為海。是夕有鳴聲。如鼓。聞東方有人

曰。伊豆嶋西北二面。自然增益。三百餘丈。更ニ為一嶋。則如鼓

音者。神造是嶋響也。と見え。此を伊豆國に坐し阿波咩命

第百三十一段の傳ふ注ふを見べし。此の類は神態をぬち多う也。はと仙覺う万葉抄ふ。

古老言とて。富士あし高のあはひれ道を。昔は旅人通る

依間。重服觸穢の者も朝夕通ゆける哉。足柄明神いとは

せ給ひて。今此浮嶋の原と云む。南海の中ふ。浪よめられ

多有る依を。打寄させ給ひてけり。と云ひ祈年祭ふ伊勢

大御神の御前ふ白け祝詞ふ。狹サキクニ國者廣久。峻トビ國者平久遠。

國者八十綱打挂氏引寄如事。祝詞考よ狹國を廣くとを

出雲風土記ふ其國狹く作

を云也其意よ同じとあり此を國くと也貢奉る事の盛

ある状を稱へると詞あがら神代の國作の時此状は古

き意詞もて譬牙あ依れ也此國引は文ふ相照して辨ふ

はしと見え信友もあう云りき万葉十四上野國哥も多

胡の嶺うとせ綱を牙て寄れども云くと詠るも寄らぬ

人を強て引寄せむとゆるふ譬とるふてせ見え依れど

此れ故事を思ひてふやとぞ思を依く。

を引て。始をかく依事あゆけむ。後世ふも奈良都の頃ま

ずは。能言ひ傳牙しふや。今世ふては。怪と思を依く事も。

上代ふを怪とせび。神代の事はかくぞ有るると云也。○

故其地云意宇意宇は。即出雲國の郡名あ也。本ふ意宇郡

此中ふ。此郡を殊ふ大あす。○詔八雲立之語之故云くは。本よ所以號出雲者。八束水臣津野命。詔八雲立語之故云。八雲立出雲。とある。茂探て記せめ。此を前ふ。速須佐之男、大神の八雲立出雲八重垣云く。と御歌ひ坐る御詞をと。すて。此神此因引給ふ始よ。八雲立出雲因者云くと。因號ふ爲て詔牙依所以依て。遂ふ因を出雲と號と依由あす。出雲郡と云ぐ有て其郡よ。出雲郷と云もあり。大和因。ふ大和郷も有り。當因の号とあり。其をゆ。遂ふ大御因の号とあまる例おどを思ふ。此御語を詔へる地を。出雲郷なりし。郡名やれり。遂ふ因号とも成まはる。そ有依。本ふ因之大體首震尾坤東南山西北屬海。眞竜云。さき。ふ當る。凡意宇郡母理郷を因の首とい。坤を西南ふ當る。飯石郡來島郷を尾とい。東南を山をハ母理郷を山す屬。

き手間山長江山あど東ふ。從えて。伯耆因の堺あり。南を仁多飯石大原三郡山野之中也。と大原郡よ。通道よ記せ。正鳥上室原御坂琴引あぞの山あり。南方を備後因の堺あり。西北屬海と云。因此大躰を云ふ。御寄山西北よりし。出て其南西を。出雲神門二郡此大海伊奈佐の濱あす。其北浦を宇竜濱あり。楯縫秋鹿島根出雲神門五郡並大海之南也。と神門郡の通道よ記せり。さて西方。東西一百卅石見因堺よ。佐比賣山多支く山あどあり。七里一十九步。眞竜云。東を伯耆因堺手間。割を道口とし。今考ふる。ふ東西直道凡今道。南北一百八十三里一百九十一里と。出雲人三省云へり。南北一百八十三里一百九十三步。眞竜云。南を飯石郡來島郷赤穴村を限り。西南の意宇郡王作街ふ至りて。一百四十七里二百五十七步。此中。北五歩を斐伊川の渡あり。王作街より。因廳十字街。至て。一十九里正西道なり。是を除きて。北方千酌駅ふ至り。ふ凡。卅四里二百步計。去。北の程とい。因廳より。度ま。凡。卅四里二百步計。去。北の程とい。因廳より。六里二百五十七步あり。通度合へす。有。委く。在本書。

を見ゆ

を

七十七

故是八束水意美豆努神出子。
カレコノヤツカミツカミツカミノカミノミコ

天出冬衣神。亦云天。亦子赤衾。
アマノフユキノカミ。マタマラスアマノ。マタノミコアカブスマ。フキネノカミト。

伊努大住日子佐别命。此神出。
イヌオホスミヒコサワケノミコトコノカミノ

社在伊努郷中。亦其后天甕津。
ヤレオアリイヌサトナカニマタソノキサキアマノミカツ

日女命。因巡行坐出時。詔伊努。
ヒメノミコトクニメグリイデマシレトキニノリタマヒイヌ

哉出地云伊努也。
ハヤトシトコロアイヌトゾ

八束水意美豆努神。名義之。内山真龍云。八束水ハ彌束身津。津ふて。八束劔の身を云。劔の實を美とも比せとも云は。古語あり。玉銚此道之。銚此身と受け。佐比持神也。意美豆努之。大身津主ふて。大刀ふ由の依御名也。大身を意美と云ふも。主を奴と云も。其を此神の御子。天之冬衣神を。書紀ふは。天之葺根神と有て。須佐之男命。此葺雲劔也。葺根神を遣して。天

小上奉給ふ事あり。然れど彼御劔を。意美豆努命の持傳
子給ひしを。御子冬衣神に任して。天に奉^{タテマツ}上しめ給ひ
故に。二神共ふ。劔より由れば御名を負坐^カりむ。今云ふ此眞
龍説を。出雲
風土記解み見えたるを採合せて切^キ直して注せり。但
し此をもと記傳ふ冬衣神の御名を劔より由ある由解れ
たるふ本おきて考へざる。◎天之冬衣神。亦云天
葺根神。名義を。
須佐之男命。此神を遣して。彼靈劔を天上に奉給へるを
以て考ふゆ。師説の如く劔^{タチ}ふぞ由^ヨけむ。然れど冬衣は。
布由伎奴と訓べし。伎を清音
よ読べし。其布由を應神天皇卷ふ。吉
野之國主ども。大雀命に佩^カせる御刀を瞻^ミて。稱美申せは
歌の詞ふ。母登都流藝。須惠布由とあり。此を本劔末振^{ハユ}を

也。フルをフユと云む。ラレ。ラエと云ふぐひの音
便あるべき。委くは彼御卷に注ふを見べし。布由を
振^{フル}あべと云由を。まお振を布久と云ふ。古事記に。伊邪
那岐大神の十拳劔。後手^{シテ}ふ布伎都^ツくと。ゆを御紀ふ。
背^{シラ}揮と書れ。冬衣神とも。葺根神とも申せば。布久を布由
也も云て。共^ト布流^ルふ同じ言れ也。此をもと師説あれど
冬衣神の処ふ布由
伎を。明宮段。哥よ。母登都流藝。須惠布由。布由紀能須云く
是あり。奴を称名ふて主あり。哥の意を。彼処に云べしと
て。彼哥の処ふ。布由伎能須を冬木如あり。と譯れとまむ。
揮てふ言ま。此神の劔より由縁あり。と言ま。さるふ叶は
ざる故ふ。其紛をしき説を省捨て。右の如く注し。然ま
ど。已が心俣ふ。取も捨も為さる説をし。師説と云む。可
畏なれど。姑く已が。伎奴を稱名ふて。君主^{キミ}あり。葺根
説とあり。有あり。古事記の布伎都^ツと。御紀ふ揮^マと

有ふて著く。根を稱名おれぬ。奴と同じ意は予ぬめ。○赤
衾伊努大住日子佐別命。あを出雲風土記。出雲郡の條ふ。
伊努郷。郡家正北八里七十二步。因引坐意美豆努命御子。
赤衾伊努意保須美比古佐倭氣命之社。即坐郷中。故云伊
農と云ふ依て記せ。赤衾は阿加夫須麻と訓べし。此
は此御名と。外ふ見ざは詞あまど。須勢理毘賣命の御
歌ふ。蒸被柔ぐ下。拷被清ぐ下。云く。寐をし宿せ。と有
ふ思ひ合はる。赤衾被て寐ぬる由を以て。係と云ふ發語
あり。衾を食と誤れる本も有ふと。眞竜を赤食と訓
み。味鉏高日子根神と。同神あは由云ふは非説あり。
伊努元と。地名ありしを負坐はる。元と。御名あり

しを。地名小負と云ふ。本末詳あらば。后神の伊努哉と詔
此御名くと。意富須美。大住比古は男。此稱言。佐は眞ふ
も所思也。通ふ言。倭氣を別と書はふ同じく。吾君兄の約。まはよて。
此も稱言あり。第七十二段。因忍。神名式ふ。尾張因愛智郡
ふ。青衾神社と云ふ。是某衾と云ふ例あり。○社は夜斯
呂と訓べし。屋代の義ふて。案此屋をもぬく。森此茂。と
は。屋代を志て。居依と云ふ言。あははし。故社。字を母理
をも訓あらむ。あ。東雅。新野問答。埃囊抄。和訓
を。鈔ふ。竝。東西林木及神門。郡高濱村。中。久佐加。矢尾。石白
等。邊。爲。一郷也。有。西林木村。伊努谷大明神社。此郷古。出雲

郡今入楯縫郡と云和名抄。出雲郡伊努郷あまを當
今本ふ伊努を時にあち舊の如くありと云。但し
あるを誤あり。けりて神名式ふ。出雲郡ふ。伊努神社と載ら
れぬは。風土記ふ。同郡ふ。御魂社。意保美社の間ふ。擧と
る伊努社ふ。けりて同郡ふ。伊農社。同社。同社。伊努社。同
社。同社。と擧て。竝在神祇官と記して。都て七社あり。此を
みお日子佐別命あらむを思ふ。神名式ふ合考ふる
ふ。非ぬ神ぞ多のゆけは。其説長らまば。此は洩しぬ。凡大
た風土記抄ふ。伊努七社の事を記して。伊努郷林木村大
谷大明神。林木大明神。西林木權現。佐子能權現。八社父大
明神。日乃都麻大明神。比賣大明神也。式云。伊努神社。同社
神魂伊豆乃賣神社。同社神魂神社。同社比古佐和氣神社。
意布伎神社。都我利神社。伊佐波神社。まと不在神祇官と
等也と云るを引合せ見て辨ふべし。

記せぬ社の中ふも。伊努社。諸本ふ。伊を同ふ誤れり。今て
堤朝風本ふ按せる。一本ふ依
り。同伊努社。同社とあり。はと彌陀彌社の下ふも。同伊努
社。同社。同社。同社と見ゆ。おの弥陀彌社此下ある四社を
諸本ふ脱せる。今を信友が按
とる一本
ふ依まゆ。其后天甕津日女命。后を伎佐伎と訓げし。其
由を下ふ注第九十九段。嫡后。名義甕を嚴ふて健き義。
委くハ第十五段。甕速津を助辭あり。けりて此神を誰神の
日神の下見るべし。
御子と云ふと傳ふし。神魂神の御子神も數降坐して。因
を作給する中ふ。女神も多く坐せむ。此神も。産靈神此御
子ふや坐けむ。此を比賣神ふ坐せむ。因巡行坐ると有を
按ふ。甚健き神ふ御んむ。因巡とを因を造堅免巡は
こをある由を既ふ云へり。

此の状を思ふ。御夫とを引離れてぞ作り巡り給り
依と通もまば。然むの正健くは御あがらも。勞れあうじ
れぞして。御夫神の戀志く思し出らまて。下の歎きは爲
給りるあらむ。○詔伊努哉。本ふた。伊農波。彼倭建命此
妃弟橘比賣命を戀坐して。吾孀哉。詔へるふ同じ。波夜
は。師説ふ。其物多思ひて。淡く歎息辭あす。波母と似て。波
母と正も重く聞ゆ。但し。波母た。いぢらと尋求むる意を
あるを。波夜は。然る意を聞えび。
何正。れ不倭建命の處ふ委く注せす。景行天皇卷を
見て知るべし。 諸あ
此伊努波夜と詔りる地也。上やば別ふて。秋鹿郡あす。本
ふ。伊農郷。郡家正西一十四里二百歩。出雲郡伊農郷坐赤

衾伊農意保須美比古佐和氣能命之后。天甕津日女命云
云。と件の故事を記せす。鈔よ。並伊農村。伊農浦。波多浦。爲
郷と云へり。和名抄の郷名ふも。
秋鹿郡伊農とあり。はと同郡ふ。伊努社をも載とす。但し不在。神祇
官と見ゆ抄よ。
天甕津日女命也。稱伊努郷客大神といへり。けて尾張風土記ふ。丹波郡吾縵郷。
卷向珠城宮御宇天皇品津別皇子生七歳而不語。後皇后
夢有神告曰。吾多具罔之神。名曰阿麻乃彌加都比女。吾未
得祝。若爲吾元祝人。皇子能言壽考。帝上人覓神者。日置部
等。祖建岡君。卜食。即遣覓神。時建岡君到美濃。罔花庶山攀
賢樹枝。誓曰。吾縵落處。必有此神。縵云。落於此間。乃識有神。
因豎社。由社名里。後人訛言。阿豆良里也。と云。阿麻乃彌

加都比女命を吾ハ多具国之神ありと詔牙依を思ふ

也。此の比賣神ありと疑れし。多クを。出雲国島根郡の地名あること。前段に注

せるが如し。此傳を垂仁天皇卷の本地名あること。前段に注文に加、抄む。彼處に委く注しを見べし。此傳を見候も。

甚嚴き神ありぬ。神名式に尾張国丹羽郡に阿豆良

神社あり。當国神名帳集説と云物。從三位阿豆良名の神一、作吾鬘今在稻置庄吾鬘村といふり。當村

を和名抄ふ。丹羽郡の郷名吾鬘とある処あるべし。

故其天出冬衣神。娶刺国大出

神出女。名刺国若比賣而令生

出子大国主神。亦名国作大己

貴神。亦云大名。亦名宇都志国

玉神。亦名葦原醜男神。亦名八

千矛神。亦名大地主神。亦名大

名持神。并有七名。亦荒魂出號

謂大因御魂神。亦云大因玉神。

刺因大神師云刺佐須と訓む。凡て刺某と云言の刺例
如し。佐志を訓む。和名抄出雲因大原郡ふ佐世郷あ
の如し。風土記。佐世木をり負とる。おと見也。佐世木を和
名抄。鳥草樹佐之夫乃紀と何依是ありと云。説ふ依ら
ば。刺因右の佐世郷此事も有む。ま決免難れまど。
且く佐志と訓む。今云。師たかく所思也。れむ其ふ依り於
大神を尋常此大神と申例ふを非じ。此神殊も然崇免
て申はき由も見え。祢むれ也。女此若比賣と云名ふ對ひ
あまバ。大之神と訓はし。大と下牙置言を絶たらしむま
ぜ。大和因あどふ。大と云地名も

有まバ。大の神とも云べし。尾張因中島郡大神神社。臨む
時祭式。大或作多とあまむ。是も大之神ある例あり。や
何也。儲まこの神も其出自知はらむ。若くは伊邪那岐
て。青人草此祖と生坐る。刺因若比賣師云。此御名のあ
八百万之神の中ふ也。大因主神。下ふ須佐之男。大神此詔ふ。爲大因主神と詔
ゆ。御名此意彼處に注ひる。第八十六段。けて須勢理毘
賣命の御歌ふ。阿賀淤富久邇奴斯と作給牙也。吾が大因
因作大已貴神。亦云大名。因作也。久邇都久理と訓はし。
下ふ見えある如く。此因を作坐る大神ふ坐り故。かく
稱申せはあ也。御紀一書ふかく記さ。出雲風土記。大已

貴^キ神代紀^ノ。此^ニ云^フ於^テ褒^ホ娜^ナ武智^チ也^ト。但^シ本^共ノ^ナ。上^ニハ^ハ。娜^ノ。

古事記^ニ。姓氏^ノ録^ス。大穴^ノ年^ノ遲^シ。万葉^ノ七^ノ。大穴^ノ道^ノ神^ノ名^ノ式^ノ神^ノ賀^ノ。

詞^ノ出^ル。雲^ノ風^ノ土^ノ記^ノ。あ^ト。大穴^ノ持^ト。も^ノ書^ク。見^ル。古^ノ語^ノを^ノ知^ル。

ら^ニ。中^ノ世^ノ人^ノの^ノ生^ル。さ^ラ。し^ラ。加^ハ。あ^ト。ま^ト。削^リ。於^テ。穴^ノ。

那^ノの^ノ假^ノ字^ノ。ふ^ノ用^ノ。ふ^ノ字^ノ。あ^ト。こ^ト。や^ト。和^ノ名^ノ抄^ス。信^ノ濃^ノ。因^ノ。埴^ノ。科^ノ。郡^ノ。

郷^ノ名^ノ。大^ノ穴^ノ。於^テ。保^ノ。奈^ノ。と^シ。記^ス。せ^レ。依^ル。一^ノ。を^レ。以^テ。も^ノ。知^ル。べ^シ。然^ル。を^レ。

此^ノ。阿^ノ。字^ノ。ふ^ノ。欺^ル。う^レ。れ^テ。世^ノ。此^ノ。古^ノ。語^ノ。知^ル。ら^ニ。終^ル。輩^ノ。の^ノ。大^ノ。阿^ノ。那^ノ。年^ノ。遲^シ。と^シ。

唱^ル。終^ル。は^レ。え^ト。傍^ノ。痛^シ。し^テ。や^ト。然^ル。む^レ。穴^ノ。字^ノ。を^レ。い^ト。古^ノ。語^ノ。拾^ル。遺^ス。ふ^ト。も^ト。大^ノ。

混^ル。ば^シ。し^テ。け^レ。ま^バ。己^ノ。グ^ノ。書^ク。ハ^レ。凡^テ。用^ヒ。ひ^ト。交^ル。古^ノ。語^ノ。拾^ル。遺^ス。ふ^ト。も^ト。大^ノ。

己^ノ。貴^ノ。神^ノ。古^ノ。語^ノ。於^テ。保^ノ。と^シ。見^ル。え^ト。姓^ノ。氏^ノ。録^ス。大^ノ。奈^ノ。年^ノ。智^ノ。神^ノ。と^シ。あ^ト。は^レ。ふ^ト。

依^テ。訓^ズ。し^テ。あ^ト。万^ノ。葉^ノ。三^ノ。卷^ノ。六^ノ。卷^ノ。あ^ト。と^シ。大^ノ。汝^ノ。や^ト。九^ノ。十^ノ。八^ノ。

書^ク。と^シ。る^ト。も^ト。皆^テ。正^シ。ち^テ。那^ノ。年^ノ。遲^シ。の^ノ。那^ノ。を^レ。名^ノ。あ^ト。也^ト。那^ノ。年^ノ。遲^シ。ふ^ト。己^ノ。貴^ノ。

と^シ。た^レ。例^ナ。あ^リ。ち^テ。那^ノ。年^ノ。遲^シ。の^ノ。那^ノ。を^レ。名^ノ。あ^ト。也^ト。那^ノ。年^ノ。遲^シ。ふ^ト。己^ノ。貴^ノ。

と^シ。書^ク。あ^ト。せ^ト。也^ト。日^ノ。本^ノ。紀^ノ。ふ^ト。始^ラ。れ^テ。と^シ。る^ト。事^ノ。れ^ル。ぐ^ト。年^ノ。遲^シ。を^レ。大^ノ。日^ノ。

靈^ノ。貴^ノ。命^ノ。道^ノ。主^ノ。貴^ノ。あ^ト。と^シ。此^ノ。例^ノ。を^レ。思^フ。ふ^ト。貴^ノ。み^ノ。稱^ス。牙^ノ。て^シ。申^ス。比^ノ。語^ノ。と^シ。

通^ル。も^レ。れ^ド。貴^ノ。字^ノ。を^レ。配^ラ。れ^ド。あ^ト。る^ト。も^ト。然^ル。依^ル。事^ノ。と^シ。思^フ。也^ト。依^ル。を^レ。那^ノ。ふ^ト。

己^ノ。字^ノ。を^レ。書^ク。れ^ト。依^ル。を^レ。心^ノ。得^ル。也^ト。若^ク。は^ハ。於^テ。能^ク。の^ノ。於^テ。を^レ。省^ス。也^ト。能^ク。を^レ。

那^ノ。ふ^ト。轉^シ。て^シ。借^ル。用^ス。と^シ。る^ト。師^ノ。も^レ。疑^ヒ。て^シ。髻^ノ。鬢^ノ。山^ノ。蔭^ノ。ふ^ト。大^ノ。己^ノ。貴^ノ。

紀^ノ。近^ク。お^ト。ろ^ト。思^フ。ふ^ト。一^ノ。書^ク。ふ^ト。今^ノ。理^ノ。此^ノ。因^ノ。唯^ク。吾^ノ。一^ノ。身^ノ。而^シ。己^ノ。云^ク。と^シ。あ^ト。

言^フ。牙^ノ。る^ト。意^ノ。を^レ。と^リ。己^ノ。貴^ノ。と^シ。い^フ。意^ノ。あ^ト。と^シ。を^レ。以^テ。書^ク。給^ス。牙^ノ。る^ト。子^ノ。

牙は御言ふる故ふ。此国を指て。顯見国とを詔するぞかし。書紀ふも顯國王神。顯此云と書まよ。又上宇都志日金折命と云もあまだ。只何とあき称名して。宇都久志の意。王は借と母をたばくや。やも思ひしうど。然ふはあらじ。字よて。御靈あまよとめ。但し根国をめ。詔へ依御言まよ。ば。顯国と。此国土全ふ廣く係依言ぞ。此御国のみ此言。之。狭く思ふば。うらび。あむ此御名のおと。篤胤が思ひ。御名の出たる処。得たる説もあり。第八十六段よ。此ふ注ふを見べし。葦原醜男神。阿斯波良志許袁能神と訓べし。師云葦原之と。之を添て読を誤あま。此を出雲建難波根子あまの類あは名あま。必之とは云。例ぞ。醜を前ふ。伊那志許米。志許米伎。と有し處ふ注る如く。第二十三段。多くは惡み詈て云言れまよ。此の御名此の傳見べし。

醜を師説ふ。勇猛を美て云。けて其も人此畏み懼は。方と云。れむ。彼醜女あま。云もまゆけむ同意ふ。歸終。後。世の言ふ。勇猛人。鬼神の如し。と云。同じ。思ふ。今。語。豊。堅。き。あ。と。を。志。許。理。也。志。加。理。と。も。云。此。此。志。許。也。其。意。ふ。て。も。有。む。う。志。許。夫。都。を。云。言。も。何。り。今。云。第。八。十。三。段。此。神。根。堅。洲。国。に。到。給。へ。ま。む。須。勢。理。毘。賣。命。出。見。て。目。合。し。て。相。婚。坐。て。還。入。り。て。其。御。父。の。大。神。よ。甚。麗。神。參。來。坐。於。と。白。し。給。へ。依。を。思。ふ。よ。此。醜。を。家。ふ。師。説。の。如。け。て。葦。原。を。志。も。云。は。天。下。を。宇。志。波。伎。坐。く。よ。ぞ。有。る。依。せ。ま。む。れ。也。上。よ。云。ひ。如。く。此。国。を。葦。原。中。国。と。云。也。天。上。呼。は。し。給。へ。人。世。と。れ。ゆ。て。も。内。色。許。男。命。内。色。許。賣。命。の。名。あ。る。ば。し。人。世。と。れ。ゆ。て。も。内。色。許。男。命。内。色。許。賣。命。伊。賀。迦。色。許。男。命。伊。賀。迦。色。許。賣。命。れ。と。云。名。も。あ。也。皆。色。ふ。之。と。は。と。孝。德。天。皇。紀。ふ。高。田。醜。雄。醜。此。云。と。云。人。も。見。む。云。は。と。孝。德。天。皇。紀。ふ。高。田。醜。雄。之。渠。と。云。人。も。見。

ゆやほ也。○八千矛神師云。万葉六ふ。八千梓之神之御世
とゆ云。ほと十ふも如此と也。此も武威の八千と多
く此矛持ある如き此意ふ稱し御名あははし。千此意
は今一の考も何也。其を細戈千足圍の解ふ云ふとあり。
細戈千足圍てふ号は神武天皇卷ふ
出とれむ此師説を其処に注し於 ちて大倭神社註進
状。舊記を引て。大己貴神以廣示爲杖令撥平豐葦原中
國之邪鬼是時號曰八千戈神と何也。○大地主神地主を
登許奴斯と訓べき由を既ふ云す。第七十四段 地主神の処 ちて大
を神名ふ係依例の稱言よ非也。地ふ係る大ふて。大地乃
主と云意は御名也。大地と云。天皇は大地宮所の義ふて。

大八嶋圍ふ對乎て。小はく云や。地を大倭國を云ひ國土
全ふ對へて。大地く云ときを。皇國の地を大宮所あはは故
稱乎て大地と云申はあ也。國土を或はて。本地と云と云
は多此は大國主神の亦名をハ云乎と案ふを宇都志國
王と申は御名と同く。大國主神の現は御名了ハ非は其
荒魂大國魂神は大地の官を治給ふ謂ふ依て。負坐は亦
名あ也。其は下ふ引く。大倭神社註進状は傳を見て知る
法し。○大名持神。天皇紀。まよ延喜式。此御名見え
る小依 御名は意は。岡部翁云。凡て古乎。名の弘く長く聞
ゆはを譽とひ也。れを。天皇は宮所を遷し賜ひ御子おは

し坐ぬ后。まゝ御子とちは。御名代の氏を定免。まゝ名背。名根名妹あど云ひ。万葉二ふ。大名兒あど何依も。皆名高。死由の美詞。人ふ向ひて。那牟遲と云も。名持てふ言ふて。美る稱れ也。今云。師説も。既よ上ふ注る如く。汝字を漢大奈牟遲あどの牟遲あり。物語文ふ。伎牟遲と云稱も。あり。伎牟君此意あ也と云れ。依ハ然依説。了て。今世ふも。女語。了父をともち母をりも。ちま。其も斯て此神也。ちあど云も。同語を通ゆる。多女思ふ也。天下を作也。治免知。給子依御名也。世小勝とまむ。大名持と美稱子申せ也。牟遲を母智の轉ま依あり。○并有七名。古事記ふは。八千矛神と也。以上五名を舉て。并有五名と記し。御紀よむ。其五名此外ふ。大物主神。大因王神といふ。

名を加すて。凡て七名を舉られ。古語拾遺ふむ。大己貴神。一、名大物主神。一、名大因王神。一、名大因魂神と。四名を舉ぬ也。然れど大物主神と申は御名也。其和魂の御名大因。せさる亦名とハ申し難れ。まむ。大因魂神と申は御名をば下ふ別よ記し。大物主神と申は御名也。第九十五段よ。出れむ。此の亦。けて古事記ふ。并有五名と何依五名を。岡部翁の。那伊都くと訓れあるぞ。此方此物言ある。と記傳ふ有れど。今七名を。那くと都と訓むを調悪れむ。那と都能美那を訓也。○荒魂のおやは。既ふ委く注せ也。死。第十七段の。○大因御魂神。亦云。大因王神。大倭神社註進狀ふ。謹考。舊記曰。倭大因魂神者。大己貴神之荒魂。與和魂戮力一心。

經營天下之地建得大造之績在大倭豐秋津因守因家因
號曰倭大因魂神亦曰大地主神云々和魂と云大物と云主神を申せり
ひ。外不家牒を引て垂仁天皇の御代ふ大水口宿禰ふ著
て。我親治大地官と詔する事をも記して大地主神之
號起于是時矣とあり。此ふ依て大因魂神と申はる其荒
魂の御名れまむ。打任せて亦名とは云がとき事も大地
主と申はる荒魂神の亦名ある事をも辨ふべし。外不大神此事は第九十六段第百九十八段第百三十段まと孝昭天皇元年七月此処崇神天皇六年九月の処同七年八月の処垂仁天皇七年九月此処あどを見て知るべし。但し孝昭天皇以下む注進状の傳ふ依て注せり。けて
師説ふ因魂神と云は此神ふ限らば各々其因處ふ經營

此功德ありし神を如此申して記れる故ふ因々大因
魂神社因玉神社と云多し。其中よは此大名持神
を齋するも有ぬべし。を言れまは冥然依説あり。其末の條
條よ因ふ記しも
て行くを見へし。

九十七

於是健速須佐出男命詔曰此

天藪雲劔者神劔也吾何敢私

以安乎詔而遣孫子天葺根神

而。上奉於天照大御神。于時天

照大御神詔曰。是我劍也。吾屏

岩屋出時。所落近淡海。出伊布

貴山劍也。詔矣。然後健速須佐

出男命。居熊成峯。而遂入於根

因矣。故亦名謂月夜見命。亦謂

八束髮早佐須良神。

於是。上此條。くみ見。とる御子神。とち此。因作り給ふを
始矣。種々の功德を建給ひ。大因主神の生坐るまで。我承
て云也。須佐之男。大神の根。因よ入坐る。大因主神の生
坐して後あること。第八十三段。は徴とひべき事
也。○天。蓑雲。劍者神劍也。神劍を阿夜志伎多知と訓也。
即本よ志。元を也。大蛇の尾。ふ含めて。空よ常よ雲氣立騰
也。此大神の常。ふ佩給ふ御劍。此刃さ。了。缺。と。御劍ふ

と有れむ。得給するを久しく御許に安置給へ依間よ。
種く此神異き事ども有れむ故よ。如此詔字依あるべし。
景行天皇此御世よ倭建命の佩し給へ依間よ。種
種神異しき事の有しを思ひ合せて辨ふべし。○何敢
私以安乎を伊加傳私邇母氏伊都加米夜と訓べし。然ば
か。神異き御劔を御自比御物として。御許に安置給へ
む事れいと惜れむ。天よ奉る。天照大御神の御物よ
爲むと今思召し付まし趣あり。是をきて此神比大御神
御心の布ど推量り奉るべし。○孫子を直ふ美比古ともはと比古美古
とも訓ばし。神祇譜よ。素盞鳴尊孫子。天之冬夜神と有る。
日本紀よ。五世孫と有るを。○是我劔也とむ。其奉り給る
誤おはこと。既よ徴ふ云。○

依劔を御覽して。是を元我劔とて有しと詔するれ。○
屏岩屋之時とは。須佐之男命此荒びを畏はして。天岩屋
よ幽居ませ依時我詔するれ。○近淡江を上よ出で。其
處よ注す。第四十七段。○所落伊布貴山劔也。大御神の此比
御詔の傳を。雲州天淵記よ。素盞鳴尊奉劔天照大神。大神
曰。我屏天岩屋時。落此劔。江州伊布貴山是我神劔也。と有
を採れる。あや。徴ふ云。源平盛衰記。三種。室劔。事を
れらむ。我私よ安むやとて。天照大神よ奉る。大神大よ悦
まし。吾天岩屋よ閉籠し時。近江國。膽次。の巔。落
と。正し。劔ありとぞ仰る。と見え。埃囊抄よ。も。此。事。あり。
神社考。熱田宮。條。膽。吹。明。神。條。あ。げ。お。も。此。傳。を。奉。ら。れ。と。
る。文。の。さ。ま。少。異。あり。何。依。て。書。れ。お。ら。む。彼。も。此。も。
元ハ假字日本記の如き古記より出と依古傳よぞ有る

きけりて此劍はしも正ふ大蛇の尾と出と依字。大御神
此是我劍也云々と詔乎と云ふと前ふを信ぐ多く思
乎とて我。岩屋小屏坐る時小落せ依とて詔乎。と有ふ
依て熟思乎。た。深き謂あ依傳よあむ有る依。然るは彼段
小。天津日子根命此御子。天麻比止都命亦名天小科せて。
雜刀雑刀を作し依と依由見え依は。新宮作る料此刀物を
更ふ。太玉串小取著て。御幣と奉依劍をも必作すむ
ぐ。其を落せ依を。太蛇の尾小含み持と依事と所思と也。
斯云ふ由は。まお景行天皇紀十二年此處小筑紫小幸坐
し。周芳此娑磨小到り給乎ば。其地の魁師神夏磯媛と云

ふ女人磯津山の賢木を拔取りて。上枝挂、八握劍中枝挂、
八咫鏡下枝挂、八尺瓊、それを捧ぐる參向へ奉れるを始也。
此例あ不見え依の。其在仲哀天皇紀ふも筑紫小幸坐
參迎奉れる處も五百枝賢木を拔取りて。上枝挂、白銅鏡、
中枝挂、十握劍下枝挂、八尺瓊、と見え伊觀縣主五十迹手
が參迎奉れ依處も五百枝賢木を拔取り上枝挂、八尺
瓊、中枝挂、白銅鏡下枝挂、十握劍、と見也此事筑前風土記
小見えるとも同じ各挂とる枝を。此を師説の如く。天照
大御神の石屋戸小幽居坐依時ふ。如此して招禱奉れる
小例乎依式と通也依よ。其事此本と依。石屋戸段此賢木
は。鏡と珠を著とる由は見あれど。劍を著と依あや
見え。古事記古語拾遺御紀正書一書もみあ同じく延
曆儀式ふも此時の太玉串此事を上枝懸、八咫鏡、

中枝懸八咫縵乃曲玉下枝懸天眞麻後天日嗣の御璽
木綿氏種々祈申支と有て劔を奉りし。後天日嗣の御璽
此鏡劔玉の三種を奉る本因を思ふも其時此太玉
申ふて必天麻比止都命此作れ依劔をも著て立奉るは
此謂ふ依も著さすは其料も作れ依劔を未著さ依間
ふ伊布貴山も落せ依故も有るむ。然まど劔を必著て
讒を追て人世とありても天皇ふたに於も劔を著て献
まらるるむ今も土庶人に至るまで重き礼式も必劔
を贈れ依事あるを。ちて伊布貴山も落せる劔を出雲因
も思ひ合ふべし。如何ふ志て其尾も含み持
ぬ依高志も住依依袁呂智ぐ。如何ふ志て其尾も含み持
ぬ依もむと考ふるも。は於彼伊布貴山も近江因と美濃
多と此堺も在て。西に近江の坂田郡東は美陽成天皇紀
因と此堺も在て。濃因不破郡池田郷あり。

ふ近江因坂田郡伊吹山即七高山之其一也とあり。此全
景行天皇卷の傳ふ引べし万葉も此山の哥あり。続古
今集も曾祜好忠冬深く野を成ふるに近江の伊吹の
外山雪降然らしと見ゆさて七高山とは同因形依比叡
山比良山根津因島上郡神峯山城因葛野郡愛宕山大和
因吉野郡金峯山紀伊因郡高野山あり。神名式も坂田
に但し異説あるると埃囊抄も見えとあり。神名式も坂田
郡も伊布伎神社あり。此社のおと因史も嘉祥三年十月
現元年正月廿七日從五位下伊富岐神從五位上同九年
四月二日遣神祇大祐正六位上大中臣朝臣常道向近江
因伊福伎神社奉弓箭鈴鏡元慶元年十二月廿五日
日授正四位下伊富岐神從三位おと見えとあり。はと美
濃因不破郡も伊富岐神社あり。今坂田郡も不破郡
をぞ因史も仁壽二年十二月癸亥以美濃因伊富岐神列
於官社貞觀七年五月八日授美濃因從五位下伊富岐神
從五位上同十一年十二月五日授美濃因從五位上伊布
岐神正五位下元慶元年閏二月廿一日授從四位下伊富

岐神從四位上、おと見也。當國の式社考ふ。在伊吹村。去垂井、馭北一里許。今稱伊吹大明神。といふ。坂田郡あるも此社もかく厚く御行ひ坐るを思ふ。伊豆速きお合せて、まよ伊豆速き靈驗も有し故ある。此伊布伎神社を、やのて此山を宇須波伎坐也神の社ふて、其神を帝王編年記元正天皇養老七年此處ふ。因了記 古老傳曰。霜速比古命之男。多く美比古命。是謂夷服岳神也。次比佐志比女命。是夷服岳神之姉。在久惠峯也。次淺井比咩命。是夷服神之姪。在於淺井岡也。是夷服岳與淺井岳相競。長高淺井岡一夜增高夷服岳。怒拔刀劍殺淺井比賣之頸。墮江中而成江嶋。名竹生嶋。其頭乎とあほ。多く美比古命。亦夷服岳神。ふぞ有けは。此傳をいと神世の事と聞ゆる。古風土記の傳あるべし。色葉字類抄竹生

島の條、まよ竹生島の古縁起ふも、淺井姫命、与氣吹雄命、競勢争力、云くと有て、此も何よ出ると云ことを云を、よく美比古命、此父神、霜速比古命の出自を云ざれむ、其本系を知べた由あきた、最惜き事あり。 倭建命、此山ふ荒惡神あてと聞して、其を取らむと登坐あふ。此山の主神、大蛇ふ化て道ふ横だは、雲を興し、氷を零し、霧を立て、噎せあふ。失意ませあ事あり。此主神と有む。多く美比古命。亦名夷服岳命の態あてし、おを疑あし。然まよ山名は、谷川士清説ふ。以山神吹毒氣之義得名也。云あは然る説あて。師も此よ依られあゆ。然るを或説ふ。伊布伎神社の祭神を氣吹戸主神よて、風神と同神あてと云ひ、彼荒惡山神と別神ある由を論ひて、記傳ふ伊服伎を云名の義

た山の神毒気を吹由ありと谷川氏云有り然も有べし
と言れしむいもの云ふを却て非説あり其御紀は
主神化蛇とあるまや主神と有れむ伊吹岳神あらで誰
神あらむ上より引依帝王編年記の傳と合考へて辨べし
はて上件の趣ふ依て考ふ依り源平盛衰記に彼八岐大
蛇は膽吹神化け化ま依由云有り古傳に據りて記せる
正し死説ふぞ有る餘書どもふも膽吹神者八岐大蛇
之所變也と云ことも彼此見とめ
其は宇武賀比く賣命の法吉鳥化け言代主神の熊罴
を化け櫛八玉神化鶉と化け建角見命化八咫鳥と化ま
依例あどを思合はるふ然ばうり伊豆速ぶる神おたは
せむ其山お落と依神劍を竊み持ち袁呂智と化て出雲
国よも住み通け人まも取て喫むむむ然も有べき事お

あそ此は就ても其出自の知られぬらましうば猶妙
ある考へお出來べきを傳おきをいかりせむは
て彼神劍はしも八百万神とちの神議くて行ふ神事お
用ふ依料の齋劍お依り未用さ依り落とめむむ最異
あく須佐之男大神化其を得給へる事の奇異お依功を
更におも言はぬ神物と年久お齋き持給りれむ其御魂の
留けむおと言はくも更お依れ然る珍重化餘りふ天
照大御神よ上奉給りれむ遂よ其本お歸りて後よ大御
神の御靈を留給へる八咫鏡と竝べて皇美麻命化御く
せくお天璽と賜り依り太玉串化式のままお鏡劍玉
を三種お備をけ天璽の御寶と成ぬ依事化運を思ふお

いをも奇ミみ。いとも妙タあ依事あり。前ノ御紀古事記
思へる程。此神劍の事を思ひ連けり。蛇と有きと
眞劍の袁呂智が躰中。有べき由無き。蛇尾は悉
く極めて堅き骨針。如き有て木竹をも切らる。此
御劍も然る類の骨ある。然ば大奇依袁呂智が
躰より出され。宋此劍の大さ。此傳を撫ひ得て右
物。ふぞ有らむと思しう。此蛇を撫ひ得て右此如
考。さる今ありて思ふ。此蛇の尾。針の如き骨
あ依事を。彼袁呂智の祖。とも云はき物。あまむ。彼
尾。神劍を含み持とゆ。縁ふり。今も蛇。然る
骨の有。あらむ。此よ依て思。牙む。霜速比古と云。神は
龍。神比末。れど。非ざる。斯て後。ま。熟思へむ。霜
速比古。命。云は直。霜を司。神。ふて。龍。神の属。あるべ
し。劍を秋霜と云。あども。由あ依事。ま。非ざ
依。猶水分。神。狹霧。神の下。をも考合。ま。非ざ
は。と此。ふ就
て猶按サふ。既。ふ言依如く。近江。国は。天津日子根。命の。天
降。正經營給へ。と聞えて。其由ある地名とも多く。其御

末此氏。彼国。小住。布。び。あ。神名式。ふ。蒲生。郡。馬見岡。

神社とあ依。天津日子根。命。ふ。坐。ま。し。野須。郡。御上。神

社名神大月とあ依。は。天御蔭。命亦名天麻。ふ。坐。ま。し。あ。と。

悉く幽フき契キある事。あ。る。も。国。ま。坐。ま。し。事。三十九段。

此傳。ま。委。く。注。ち。て。神名式。あ。依。坂田。郡。伊布伎。神社。ま。と

美濃。国。不破。郡。あ。依。伊富岐。神社。あ。と。は。倭建。命。此。事。あ。り

て。後。ふ。此。山。の。神。此。荒。び。を。畏。み。て。齋。記。れ。る。社。あ。依。べ。し。

あ。不。此。二。社。此。こと。ま。と。此。山。の。事。も。景。行。天。皇。卷。の。傳。あ
委。く。注。ふ。を。見。べ。し。倭。建。命。此。山。ま。入。坐。る。時。毒。氣。を
吹。さ。る。大。蛇。と。化。て。須。佐。之。男。神。あ。○。然。後。は。遂。入。於。根

国。と。云。よ。係。る。語。あ。り。居。熊。成。峯。と。云。よ。上。件。ふ。注。る。如。く。

御子多ち此因作、巡_レ給ふを見立はし。神功の終_リ。神劍
をむ。天照大御神_ノ小獻_レて後、遂_ニ理_レたまふ。根_ノ因_ノ小
入坐_レめと云_フる_レれり。○熊成峯_ノ。記傳_ニ。久麻那須_ノ乃峯_ノと
訓_テ。即_チ熊野_ヲあ_ハべ_シ。那須_ヲ切_テま_バ奴_{アリ}。此_ヲワ_ニ。
リ_ト訓_テ。鰐淵_山の事_ト云_フる_ヲ非_ナ。
也。言_ヒ。出雲風土記_ニ。意宇郡熊野山_ノ郡家正南一十八
里。所謂熊野_ノ大神之社坐_スと見_ユ。斯有_レむ此山は須賀山
也。相竝_レば。然_レむ熊野神宮_ノ。即_チ須賀宮處_ヲあ_ハす。故思_フ
ふ。久麻野_ヲ隱_レ野_ノの義_ヲふ_テ。御歌詞_ニ。此都麻基微_ノの由_ヲあ_ハ
ばしとあ_リ。あ_ハ第_七十一_段。須賀宮_ノの○根_ノ因_ノ。上_ニ此_ノ
神_ノの哭_キみ給_テる_レ段_ノ。吾_ハ母_ノ因_ノ根_ノ堅_ノ洲_ノ因_ノ小_ノ罷_ラむと

欲_ヒて哭_キと詔_レへ_テ因_ノあ_リて。即_チ夜見_ノ因_ノあ_リ。此_ノ因_ノの事_ヲ。既_ニ
次_ク委_ク注_セる_ヲ。遂_ニ入_レむは。此_ノ神元_ヲと_ル。御母伊邪那美_ノ大
神_ノ小_ノ屬_テ。夜見_ノ因_ノ小_ノ往_テ坐_スば。淡_ノ理_ノの坐_レを。此_ノ淡_ノき
とは_ニ第_三十_段の傳_ニ。御父伊邪那岐_ノ大神_ニ。汝_ノ命_ハは_ニ青_ノ海_ノ
委_ク注_セる_ヲを見_ユ。原_ノ淳_ノの八_ノ百_ノ重_ヲを所_レ知_ラせと事_ヲ依_テ給_テめし_レむ。元_ヲ也_ニ淡_ノ
き理_ニあ_リて。御母_ノ許_レ往_テ坐_スは_ニく思_フ食_レ御_ノ性_ノ小_ノ違_ヘは_ニ故_リ。
哭_キみ_テ否_シ給_テる_レ。然_ルも御父_ノの大神_ノ。ま_チに其_ノ御心_ヲ
小_ノ違_ヒ給_テへ_テ事_ヲを御怒_レ也_ニ坐_シし_レむ。情_ニ任_テ夜見_ノ因_ノを
知_ラせと。許_シ給_テる_レし_レむ。其_ノ由_ヲを請_テさ_シむと。高_ノ天_ノ原_ノ小_ノ
參_上也_ニ給_テる_レ。小_ノ所_レ思_フ食_レさ_シむ。大_ノ御神_ノの御疑_ヲ承_テ給_テひ_テ。

まむ八束髪を早ふ係ある發語あり。髪カミの生ナゆ由ユをモもて云係ケあり。早佐須良は速佐須良比賣神比處ニ注ツる如く。根ネ因ニ遷ツをえ給ふよ就て。負坐フイる御名あり。第二十四段第二十七段第五十九段おど注ツるを合セ考カふ。万葉六ふゆ月歌ふ。山ヤマ葉ハ乃ハ左佐良ササ復フ壯ツ子コ天原アマハラ門ト渡光見良久之好藻ワタヒクミミラクノヨシモとありて。其下ふ。右一首歌。或云月別名曰佐散良衣壯士也。緣此辭作此歌と見とあり。月ツキはち豫美因ヨメの大地と断離キレとありて。須佐之男スサノヲノヲ大神の遷サツひ就坐イデし。所知食シ因ニあり故ユ。其故事と文コトありて。月夜見を佐く良衣壯士とも云ふあり。佐須良波衣サスラハを佐サ言コト此コト勢セ。月豫美と大地と断離キレは時トキの古コとは。未マ注ツふ。

第百三十八段の傳見るべし

○門人岩崎長世。近藤至邦。樋口光信等いふ。此十六れ巻を。木小れ布せて。人よあやしく得させ奉と議カれるは。信濃因伊那郡林のちと長片桐春郷イシキ。一色イシキの里長熊谷達直。飯田の市小酒造る平澤義登等あり。かくて上れ十三の巻よ。古コれ十六の巻まで。何ナニをせ。四卷を第四秩とあり小れぬ。

彫工 木邨房義刻

伊吹迺屋先生及門人著述刻成之書目 塾藏版

○古史成文 <small>神代部</small>	三卷	○古史徵 <small>神代部六冊 關題記五冊</small>	十一卷
○古史傳 <small>自初卷至 廿八卷</small>	七秩刻成	○古史本辭經 <small>五十卷 義訣</small>	四卷
○神代系圖 <small>折本 箱入</small>	一帖	○同 <small>挂軸料</small>	一枚
○靈能眞柱	二卷	○神拜詞記 <small>折本</small>	一帖
○太元圖說 <small>石指</small>	一幅	○古語拾遺校訂	一卷
○祝詞式正訓	二卷	○神字日文傳 <small>疑字 篇附</small>	三卷
○弘仁歷運記考	二卷	○大祓詞正訓 <small>折本</small>	一帖
○天津祝詞考	一卷	○鬼神新論	一卷
○春秋命歷序考	二卷	○入學問答 <small>附著述 書目</small>	一卷
○赤縣太古傳 <small>初帙</small>	三卷	○赤縣太古傳成文	一卷
		○三五本因考	二卷
		○學神号 <small>石指</small>	一幅
		○大扶桑因考	二卷
		○古史年歷編畧	一帖
		○度制考	二卷
		○万聲大統譜	一幅
		○玉多須喜 <small>二帙</small>	十卷

○刻成書目

○全

○三神山餘考 一卷	○古今妖魅考 三卷	○古道大意 <small>講本</small> 二卷
○俗神道辨 <small>講本</small> 四卷	○靜乃石屋 <small>同</small> 二卷	○西籍概論 <small>同</small> 三卷
○出定笑語 <small>講本附錄</small> 凡六卷	○伊吹於呂志 <small>同</small> 二卷	○悟道辨 <small>同</small> 二卷
○牛頭天王曆神辨 一卷	○童蒙入學門 一卷	○三易由來記 二卷
○鑿宗仲景考 一卷	○太界古易成文 一卷	○太界古曆成文 一卷
○大道或問 一卷	○皇典文彙 三卷	○赤縣歷代尺圖 一枚
○古學二千文 <small>講本附</small> 一卷	○古易大象經正文 一卷	○說文解字序 一卷
○宮比神御傳記 <small>御影附</small> 一卷	○天滿宮御傳記略 二卷	○日女島考 一卷
○古道訓蒙頌 一卷	○神德畧述頌 一卷	○叶古要略 一卷
○荷田翁啓文 一卷	○草木異種錄 一枚	○魂魄分層圖 <small>說括</small> 一幅
○祭典略 <small>祭文例附</small> 一卷	○千字文 一卷	○諸職祖神号 <small>石括</small> 數種
○神字原五十音 一枚	○皇祖宮所考 一卷	○故大人遺訓措物數種

195
4
111

